

小田原史談

第 213 号

 発行所 小田原史談会
 小田原市酒匂2-24-13
 植田方 TEL (48) 9072

西岡 逾明 — ある文人司法官の生涯 (2)

直江 博子

西岡逾明は、漢詩と書をよくした人物である。『佐賀県先哲遺墨集』(西村健三著、肥前古書刊行会発行、大正十五年)には、「西岡逾明宜軒と號す佐賀の名醫春益の長子なり幼より文學に秀づ」と、逾明のことが紹介されている。逾明にとつては、読書をする、漢詩を詠むこと、書を書くことは、呼吸をするのと同じくらいに、自然なことであり、また、愛してやまなかったことである。

逾明は佐賀藩士にして、佐賀藩十代藩主鍋島直正公の御典医をつとめていた父、西岡春益の長子として生まれた。逾明が本名であり、号を宜軒といった。本連載の副題は「ある文人司法官の生涯」である。先号で、今号より、逾明の生涯を刻した碑文の解説に入りたい、と申し上げたが、その前に、文人として

の逾明を少しくご紹介させていただいてからの方がよろしいのではないかと考え、今号では、逾明の遺した漢詩を一つ、ご紹介させていただく。

司法官としての逾明は、中央にあっては大審院判事をつとめ、地方へ転勤となると、控訴院の院長をつとめていた。

それでは、逾明の詠んだ漢詩「五稜郭」を紹介する。これは『北海道の漢詩 初編』に収められているので、そのまま引用させていたたく。

五 稜 郭

西岡 宣軒

 硝煙蔽海万雷轟
 一死空留烈士名
 今日恩仇兩無怨
 春風徐度五稜城

 (下平声八庚韻)
 五 稜 郭 西岡 宣軒

 硝煙海を蔽い万雷は轟く
 一死空しく留む烈士の名
 今日恩仇両つながら怨無し
 春風徐るに度る五稜城

〔語意〕

 硝煙―火薬のけむり
 烈士―剛正にしていさむ士

〔大意〕

春風を受ける五稜郭城を見ていると、海を蔽った火薬の煙と万雷の轟く中で死んでいった烈士の死が空しく思われる。今は恩と仇とをふたつながら有してうらみはないのである。

始めに申し上げたいのは、この漢詩集に収められた時に、逾明の号が、おそらく誤植のために、「宣軒」と、間違つて印刷されてしまったということである。逾明の号は「宜軒」であったというのを、くれぐれもお心に留めておいていただきたい。

函館といえ、まず思い浮かぶのは五稜郭である。そもそも五稜郭は、安政元年の神奈川条約によって、函館を開港することとなったため、函館防衛を目

的として、幕臣武田斐三郎の設計により、一八五七年に着工、六四年に完成した、ヨーロッパの花菱型城塞である。大砲による攻防を主眼に置いて築城された。

ここでしばし、幕末から明治初めへと思いを馳せてみたい。江戸幕府の時代は終わりを告げ、王政復古が行われたが、維新政府の、旧幕府方に対する厳しい処置に反発した江戸幕府最後の将軍、徳川慶喜は、維新政府との武力対決を決意し、一八六八年一月の、鳥羽・伏見の戦いを皮切りに、戊辰戦争を始める。(一八六八年が戊辰の年であったため、一連の戦いは、こう呼ばれることとなった。)しかし慶喜は敗退し、江戸へ逃れ、朝敵とされた。ところが、慶喜が恭順の意を示したため、征討軍参謀の西郷隆盛と、旧幕府側の勝海舟との交渉が、江戸総攻撃を前にして成立し、四月、江戸城は無血開城された。

しかし、その後も官軍は東征し、上野の寛永寺に立てこもった彰義隊の反抗二日で敗退、越後の長岡城攻防戦、奥羽越列藩同盟の中心であった会津若松城の総攻撃などが行われた。

榎本武揚らも、旧幕臣とともに五稜郭に立てこもり、官軍に抗戦したが、翌明治二年(一八五

月に降伏し、ここにやつと、戊辰戦争は終わりを告げたのである。

逾明は、地方を訪れる機会があれば、折々に、その地にちなんだに漢詩を詠み、同じく、地方に転勤になった際には、その土地の方からお頼まれして、書を遺したりしている。

逾明が函館控訴院長をつとめたのは、明治二十三年八月二十一日から同二十六年十一月二十四日までである。「五稜郭」の詩は、この間に詠まれたものと思像できる。

函館在任中のある日、逾明は五稜郭を訪れたのであろう。

わずか二十年ほど前に、ここ五稜郭で、維新政府の官軍と、旧幕臣らを率いた榎本武揚らが戦をしたのである。約二十年前といえば、たったのふた昔前のことである。自分自身も、幕末、明治初期の動乱期を経験した逾明の胸には、様々な思いが去来したのではなからうか。そして「五稜郭」の詩となったと思われる。

日本は二百数十年の間、鎖国政策をとっていた。しかし、外国の艦船が頻りに来航するようになり、それまでの政策を百八十度転換することとなる、開国を迫られた。国内の諸藩は、こ

の緊急事態にどう対処するのか、揺れに揺れた。朝廷、幕府、諸大名、諸藩の武士、そして浪人等まで含めて、志ある者は、皆、日本の将来を憂えた。

五稜郭で戦った官軍と、榎本率いる旧幕臣らも、日本の行く末を憂えていたという点においては一致しており、ただ、方法論が異なっていただけではないか。それゆえ、逾明は、「今日恩仇両怨無」と詠んだのではないか。

ちなみに、官軍に抗戦した榎本武揚は、その後明治政府の高官となる。榎本が、最後まで官軍に徹底抗戦したにもかかわらず、明治政府の高官に取り立てられたのは、比較的珍しい例であるといわれる。「敵ながら天晴れ」といったところであったのだらう。この辺りが、明治初期の政府のおもしろさ、あるいは懐の深さともいえるようか。

榎本は、駐露公使時代の明治八(一八七五)年には、「樺太・千島交換条約」を締結する。その後、通相・文相・外相・農商務相などを歴任し、明治の藩閥政府の中で、重要な役割を果たしたのである。

(以下次号)

1 注

明治八年、大阪会議(明治八年に、大久保利通と板垣退助・木戸孝允が大阪で行った会議。板垣・木戸は、当時の政府の形態であった太政官制における最高政治機関の構成員であり、行政官である参議に復帰した。そして「立憲政体樹立の詔」が発せられた。)の合意により設けられた、旧司法制度の最高機関。終審として上告事件の審理、その他皇室犯(大逆罪など)・内乱罪を扱った。(いずれも一審のみ)。昭和二十二年廃止。最高裁判所が設置される。

2

明治八年に設置された上級裁判所が、明治十四年控訴裁判所に、同十九年控訴院になった。旧憲法下の司法制度の基本を定めていた「裁判所構成法」により、設置されていた裁判所である。第二審の合議裁判所で、東京・大阪・名古屋・広島・長崎(のち福岡)・仙台・函館(のち札幌)に設置されていた。

大審院の下級、地方裁判所の上級に位置し、主に、民事・刑事の訴訟を管轄していた。現在の高等裁判所にあたる。

尾角鳳帥著 藻山吟社 一九八五年 二七六頁

題は「五稜郭」であるが、第四句では、わざわざ「五稜城」としている。「城」にしたのは、

韻を踏むためであったと思われる。

5

明治八年に締結された、日露国境画定条約。黒田清隆は、樺太放棄を建議、駐露公使榎本武揚が交渉にあたり、樺太全島を露西亜領、千島を日本領とした。

参考文献

安岡昭男編著『近現代史用語事典』新人物往来 一九九二年

新会員勧誘のお願い

小田原史談会では、常時新会員の紹介を受け付けておりますが、新年度の初頭に当たって「新会員募集キャンペーン」を行っています。

会員の皆様のご友人、知人など、歴史や文化に興味をお持ちの方を是非ご紹介ください。

新規加入などの連絡先:

中野家孝

小田原市穴部 一一一

TEL/FAX 〇四六五 一三四 一六二八

鶴井道泰

小田原市鴨宮 二五七

TEL/FAX 〇四六五 四八七 七三〇七

伝えることの大切さ

—第5回火山都市国際会議に出席して—

佐久間 俊 治

はじめに

2007年は1707年の富士宝永噴火300年に当たる。

「足柄の歴史再発見クラブ」では、2006年の初めから1年がかりで、小学生総合学習用副読本「富士山と酒匂川」(104頁)を会員共同で制作して、近隣の小学校や図書館等に配った。そしてそれを基に、小学校への「出前授業」や各地域の集まりでの講演会などを行ってきた。

開成町露木町長の勧めにより、こうした活動を、長崎県島原市で、2007年11月19日から約1週間開催された第5回火山都市国際会議で発表した。4人のメンバー(小林秀樹、井上三男、込山敏子と私)で参加した会議の様子、発表内容の要点や感想その他をご報告する(ご理解を得て、先に参加報告を特集してくれた「あしがら新聞」31号(2007/12/5)から一部引用)。

一、火山都市国際会議

(Cities On Volcanoes

Conference, COV) とい

これは、火山災害の軽減を目



井上 佐久間 小林 込山

的として、火山学の国際学術組織である国際火山学地球内部化学協会(IAGCEI, イアヴセイ)の活動として、ほぼ2年おきに開かれる国際会議である。この会議では、学術研究者のほかに、行政・防災関係者などが集まって、火山学の研究のほか、火山噴火が周辺の都市・住民に与える影響、危機管理、防災活動、都市計画などについて、それぞれの経験を語り、意見を交換する。

第1回は1998年、イタリアのローマおよびナポリ第2回は2001年、ニュー

ジランドのオークランド
第3回は2003年、米国ハワイ州のヒロ
第4回は2006年、エクアドルのキト
で行われ、今回の島原大会が第5回である。

島原市が開催地に選ばれたのは、1990〜1995年の雲仙普賢岳噴火のとき、甚大な被害があったにもかかわらず、住民と行政とが一体となった復興運動の推進や、無人化工法による防災土木工事などにより、火山災害を克服し、復興を成し遂げたことが、世界の火山関係者から高く評価されたためといわれる。この雲仙普賢岳の噴火のときには、科学者・行政・報道機関・住民の連携やコミュニケーション不足により、44人の犠牲者が出た。しかし2000年の北海道有珠山噴火では、このときの反省を基に、噴火の5年前から進められた4者間の連携が大きな機能を発揮して、1人の犠牲者も出さなかったと言う。



普賢岳と島原市内

二二三号(平成二十年三月号) 目次

文人判事・西岡遼明の生涯(2)

直江博子……………1

伝えることの大切さ

火山都市国際会議に出席して

佐久間俊治……………3

小田原城主大森氏の仏教政策

シルバー大学自主研究……………7

小田原梅干、始まりは

石井啓文……………12

田島人形芝居と「遊楽連」一座

野地芳男……………15

小田原の商店街(井細田商店会)

史料委員会……………19

小田原の下町回顧

剣持芳枝……………22

片岡日記(3) 片岡永左衛門

……………23

阿部宗孝先生追悼録(2)

武田敏治……………24

史談再録(3)

外郎の虎と早雲寺の虎

中野敬次郎……………27

飛鳥史跡巡りの旅/次回案内

……………29

深川七福神めぐり報告/久松るす

……………30

平成20年度総会開催案内

……………31

落穂集

平倉 正……………31

特別賛助会員

……………32

二、COVE(島原大会)

1、この大会は2007年11月

19日から1週間、島原市の2
施設4会場に、37カ国から火
山学、工学、医学、社会学の
研究者や、行政・防災関係者
など約600人が集い、火山

噴火のメカニズムや、噴火が
周辺の都市や住民に与える影
響、危機管理、防災活動、都
市計画などについて、幅広く
議論し、意見を交換した。意
見の発表や議論は、基調講演、
フォーラム、発表(口頭・ポス
ター)などの形で行われた。

2、参加者の意見や関心がどん
なところにあるかを、フォー
ラムとポスター発表の「テー
マ」で示すと次の通りである。
(フォーラム)

○火山市民ネットフォーラム
○住民・マスメディアフォーラム
○災害教訓の継承に関するフォ
ーラム

○被害地つなぐ再生への思想
○火山砂防と減災フォーラム
○こども火山フォーラム

○火山丸かじり!「キッチン火山
実験」

○火山学Q&A
(ポスター発表の小分類テーマ
別発表者数)

前半(11月19、20日)

○雲仙火山(24)

○火砕流(12)

○岩層なだれ(4)

○火山ガス・熱水(14)

○テフラ(9)

○地球物理(29)

○噴火史(15)

○減災対策(27)

○長期的土地利用(5)

○連携(科学者・行政・報道・住
民)(16)

○教育と広報(32)

○考古学・伝承・復興(19)

後半(11月21、22日)

○最近の研究(51)

○観測・予知・警報(89)

○教訓事例(22)

○長期的災害・リスク評価(25)

3、会議全体の説明は、同行し
た3氏の感想をお借りして補
わせていただく。

(井上三男氏)

「前略」会場では老いも若き
も、火山に対して関心を持ち活
動する人たちの幅の広さを感じ
た。また「人と火山との共生」、
「防災の正四面体」、「極限環境」
など、日々の生活では聞いたこ
とのない言葉に多く触れた。

われわれは今、地球上のすべ
てを支配したかのごとく振る舞
い、生活している。しかし世界
で、火山を背負う都市に住むも
のにとって、火山と共に生きる
と言う「考え方」は、大変重要
な意味を持っており、真剣に考
えている人たちがたくさんいる

ことを、この島原に来て感じた。

(後略)

(小林秀樹氏)

「前略」研究者は火山のどて
つばらを掘り進んだら、いくつ
もの火道を掘り当て、過去の噴
火の通り道と次の噴火の通り道
は違うことを突き止めた。土
木技術者は災害復興を安全確実
に進める「無人化工法(ロボット
重機)」を考案・導入し、行政
は人命の安全確保をするため、
市街地に「警戒区域を設定」
した。

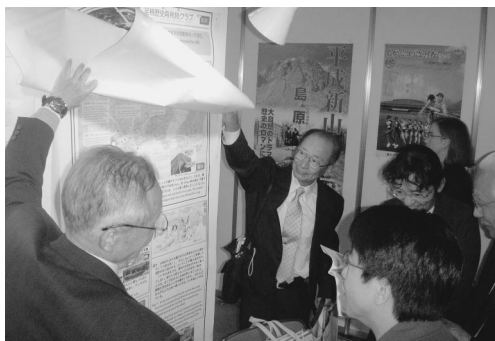
また研究機関は情報のネット
ワーク化・共有を呼びかけ推進
している。市民はフォーラムで
家族離散・避難の体験を悲痛に
訴えていた。

小・中・高校生も学校・グルー
プ単位で大会に参加している。

(後略)

(込山敏子氏)

「前略」大会は「もてなしの
心」がいたるところで感じられ
る「市民参加型」だった。自分
たちが作った副読本を使って小
学校へ出前授業を行っている
と言う私たちの説明にみんなが注
目してくれ、「学校からの依頼で
実現したのですか」などの質問
が多くあった。米国ワシントン
州のレーニエ火山国立公園のド
ハートイさんがやってきて、手
を組んでいっしょにやらないか



2人かりのポスター発表

と言った(三、参照)。また、地
元で語り部ボランティアをして
いる満行さんのお話にも感動し
た(四、参照)。島原城での交流
会では、和太鼓演奏や茶の湯接
待などがあり、海外の参加者と
共に楽しく過ごした。(後略)

三、我々のポスター発表

1、我々は七、のような内容の
発表を行ったが、これは「教
育と広報」に分類されていた。
ポスター発表は90cm×180
cmのスペースに発表内容を、
絵・写真・文字で表し、見に
来る人に説明するのである
が、手に持ったノートパソコ
ンの画面を見せて説明してい
る人もいた。ポスターも与え
られたスペースに1枚と言う
のがほとんどだったが、A3

あるいはB4の資料を何枚も貼り付けてあるのもあった。我々はスペースの制約を誤解していて、90cm×180cmの紙3枚を準備したが、会場で「スペースは1枚分厳守」とあって、やむなく3枚を上下にずらして重ねて貼り付け、1人が説明しながら別の1人が紙をめくるという芸当でしのいだ。この方が動きがあり、迫力が出た。またポスター3枚をそれぞれA3に縮小コピーしたものを配った。

2、我々の発表がどのくらい理解してもらえたか、受け入れられたかはわからないが、訪れ、立ち止まってくれる人の数は多かったかと思う。来訪者の1人、Miss Dohertyは、米国ワシントン州レーニエ火山国立公園の管理者で、「自分たちは、学校の先生 (teacher) を一定期間、レインジャー (ranger・森林警備隊) として合宿訓練し、ふたたび学校へ返すというTR-Planをやっているが、講師や受講者の相互交換などを、手を組んでやらないか」と言ってきた。

3、発表の合間に他のポスターを見てまわったが、印象に残った2つをご紹介します。

(1) 秋田大学の林信太郎氏は、中学生に火山の知識を持つ

てもらうことを目的に、いろいろな実験の出前授業を行ってきた。それを基に「世界一おいしい火山の本」という本を作り、親しみやすく、分かりやすいをモットーに出前授業を行っている。本は四万部売れ、出前授業は70クラス、二千人に及んでいると言う。

(2) 北海道苫小牧近くの樽前山は、1909年の噴火以来大きな噴火がないため、住民や行政機関の火山災害に対する認識が薄い。2004年から啓発運動が始まったが、その1つが中学生向け副読本の作成で、2007年に90頁のものができた。現物見本が1冊あったが素晴らしい内容だった。現在はこれを使ったモデル授業を計画中とのことだが、これは北海道開発局の支援を受けた「樽前山環境防災教育検討部会」の発表であった。

我々「足柄の歴史再発見クラブ」の場合、開成小学校の4年生担当の大井先生始め各先生が、積極的に我々の本を使った15時間の総合学習カリキュラムを作成、実施され、我々はその中の現地学習の部分のお手

伝いをした。



右端 満行さん

四、満行 豊人さん

発表後、レンタカーで雲仙一帯を見学してまわった、その途中我々は満行豊人さんという忘れ得ぬ人と出会った。最初の見学場所では噴出物の流れのあとを見ている時にお会いしたので、カバンの中から何枚も写真を出して「その時」の状況を説明してくださった。写真のいくつかは何枚もテープで横に張り合わせてパノラマにしたものだった。そして中には身の危険を冒して撮ったものもあった。午後行った先でまた会ってお話を聞き、別の写真を見せてもらい、何枚かをいただいた。

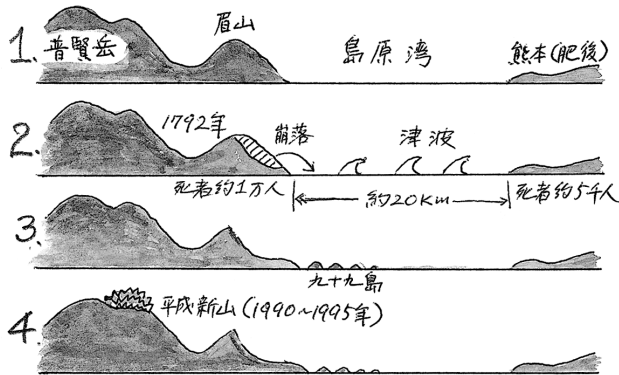
そして次の日、別の場所でもたびお会いしたが、その時は「も

しかしてまたお会いするかもと思つて持ってきました。」と、さらに貴重な写真を何枚か下さった。満行さんはもと高校の地理の先生で、「現役時代、生徒達には常々へ将来は、社会のお役に立つような仕事につくように」と言っていたのだが、消防士になっていた教え子が6人、普賢岳噴火のとき火砕流で命を失った。1人は亡くなった後に子供が生まれた。私は退職してから語り部ボランティアになりました。」と話され文字通り語り部に徹しておられるようだった。満行さんからいただいた噴火の様子の写真



五、「鳥原大変 肥後迷惑」

大会出席の事前勉強で知ったことだが、雲仙火山は約2000



年前に大災害をもたらしていた。1791年11月、小浜地区中心の群発地震のあと、1792年2月、雲仙普賢岳の噴火が始まり、溶岩流が千本木集落へ下った。桜の時期となり、大勢の人々は主峰雲仙岳の地鳴りと噴火を、花見がてら見物に出かけた。ところが4月21日、島原城下で大地震が発生、その1ヵ月後の5月21日夜、眉山が頂上から大崩壊を起こし、島原湾に崩れ落ちた。そのため津波が発生、約20km離れた対岸の肥後(熊本)を襲った。津波の高さは肥後側で20mを越えたところもあった。このときの死者は、島原1

0、184人、熊本4、653人、天草344人。また崩壊土砂量は16、000万 m^3 。わが国自然災害史上最大の人的被害であった。

六、伝えることの大切さ、むづかしさ

「火山都市国際会議」と聞いたとき、まず「それは何？」と思ひ、次に「なぜそんなものがあるのか？」と思った。いろいろな自然災害があるが、一部(気象情報など)のほかは、予知や除去が困難である。防ぐことができないなら被害を少しでも減らそうと「減災」の努力が続けられている。火山の大規模噴火は、発生間隔が長いから、どこの国や地方でも、「いつ発生しても不思議ではないのに、危機意識が薄い」、「すでにとても危険な状態にある」となっているらしい。たとえば、大会の一般向けパンフレットにもあったイタリアのベスビオ火山のふもとでは、危険とされる地域に現在58万人の人が住んでいるという。人間の救いたい性かと思う反面、人間のタフな一面を見る思いもする。

日本では、過去一万年以内に噴火した火山108を活火山として管理している。活動度によりランク分けされており、その

内訳はA(13)、B(36)、C(36)、その他(海底でランクなし・23)であるが、富士山、箱根ともBランクである。

富士山はわずか300年前に大噴火をした。そのときこの地方の人々は、富士山の位置と偏西風の関係から、溶岩流、火砕流などの災害よりも、厚く降り積もった砂や灰による農業の大打撃、また大雨のたびに起る洪水、長期にわたる避難生活などに苦しんだ。現在は300年前よりも防災体制ははるかに整備され、機器類も進歩しているよう。しかし、もし同じようなことが起こったとすると、おそらくこの足柄平野一帯は、道路などは寸断され、交通機関、電気、水道などが相当期間止まってしまいうだろう。これだけでも住民の日常生活は困難を極めるだろうが、さらに、大量の雨が降ったときにどんな事態になるかを想像すると、背筋が寒くなる。富士山は火山としてはまだ青年期にあるといわれる。発生時期の予測は現段階ではできないが、いつかは必ず起こる。

COMSに出席した我々4人は、次のように提言する。

- ①災害を予測し、被害範囲を示した地図(ハザードマップ)
- ②活用計画(対応策の立案・指導など)

②防災意識の普及と教育プログラム(身近な材料を使った実験など)

③「住民・学者・行政・マスコミが一体となった活動(防災の正四面体)」

④「火山とともに生きる」。噴火による災害を勉強して地球と共生する。

七、富士山と酒匂川—先人たちの戦いをどう伝えるか

1、富士山は日本の本州のほぼ中央に位置する。ユーラシア、フィリピン海および北米の3プレートが境界を接し、地底でマントル対流に起因する地震、火山、造山活動が起きるところ。約一万年、古い火山から大量の溶岩が流れ出て富士山が形成された。その後大きな噴火が繰り返されたが、2200年前の大規模なテフラの噴出を最後に、山頂火山からのマグマ噴出は見られず、すべて側火口からの噴火である。

2、富士山は1707年12月16日、大噴火し、2週間にわたって大量のテフラを吐き出した。それは偏西風に乗って東へ向かい、すぐ近く(須走)では4m、足柄平野で平均約50cm、約100km東の東京・

千葉でも4〜8 cmの厚さに積もった。足柄上地方では降り積もった大量の灰のため、人々は長い間苦しむことになった。

①農作物を育てるために、古い畑の土と積もった灰とを順番に上下逆転させる「天地返し」を考え出し実行した。人力だけによる気が遠くなるような作業だった。

②大雨のたびに大量の灰が山間部から流れ出し川底を高くし、そのため修復した堤防がまた崩れることが繰り返された。1711年の洪水では、酒匂川の流れが

大きく変わってしまい、新たな川筋となった6か村の一部の人々は、近くの丘の上に土地を割り当てられ、避難生活を送ることを余儀なくされた。もとの土地へ帰ったのは、150年後といわれる。

③1726年、大岡越前守に任命された田中丘隅は要となる場所の堤防を修復し、治水の神といわれた、中国の4000年前の「夏」の初代皇帝「禹、別名文命」をまつるお宮を建て、「文命東堤」、「文命西堤」と名づけた。そして石碑には

イ、堤防に桃・李・梨・栗を植えなさい。

ロ、毎年お祭りをしその際、みんな石を持つてきなさい(洪水対策に用いる「玉石」)。

ハ、幕府は東西合せて120両の資金を出す。

これらのことを石碑に刻して千年にわたって伝える。と刻んだ。

3、富士山宝永噴火300年に当たり、われわれは以下の活動を行ってきた。

①子ども達と先生への働きかけ

イ、小学校向け社会科副読本「富士山と酒匂川」(1

00ページ)の作成と学校配布。

ロ、冊子による「夏休みなんでも相談室」の開催(生徒向けと先生向け)。

ハ、冊子の公共図書館への配布。

②保護者(父母)や各地域への働きかけ

町・自治会・老人会・地域グループなど主催講演会

③地域全体への働きかけ
「富士山と酒匂川」足柄平野の苦難とそれを乗り越えてきた人々」の劇化とVTR化。

以上

おだわらシルバー大学自主研究

小田原城主大森氏の仏教政策

箱根権現と曹洞宗寺院

小田原市内と周辺の寺院や神社を巡ると、大森氏ゆかりの神社が目立つ。大森氏とは小田原

に初めて城を築き、北条早雲(伊勢新九郎)によつて落城するまでの小田原城主である。その神社を結ぶ線をたどると足柄、山北、小山、御殿場、裾野と相州(神奈川県)から駿河(静岡県)へとつながる。その線を逆にたどれば、大森氏の相模、小田原

進出へのルートとなる。

上杉禪秀の乱で小田原進出

大森氏は中関白・藤原道隆、内大臣・伊周父子の、いわゆる中関白藤原氏の流れを汲む一族とされている。系譜によれば伊周の孫の惟康が甲斐・駿河の両国司に任ぜられ、駿河の国鮎沢庄大森(静岡県裾野市)に居館を構えて大森氏を称した。この時

代、苗字の地に根を下して本拠とした豪族が多かった中にあって、大森氏はその本拠を移し、主に、黄瀬川流域を箱根外輪山に沿って北上し、幾多の支族・分流を生み出しながら肥沃な足柄平野への進出を果たそうとすることを歴代の事業としてきた。この駿河の大森氏の勢力が西相模に及ぶことになったのは、応永24年(1417年)、上杉禪秀の乱に功があった頼春が、鎌倉公方足利持氏から小田原の領地を与えられたことによる。それまで小田原を支配していたのは伊豆山権現と土肥氏だったが、いずれも禪秀方だった

ために、乱後にそれらの所領は持氏に没収され、頼春に与えられたのだ。この時、頼春は鎌倉府の御料所であった小田原関所の管理を委ねられた。すでに大森氏は伊豆三島関所や箱根山関所を管轄していたから、駿河から相模への交通路は大森氏によって維持されるようになった。

大森氏、二派に分裂

永享10年(1438年)の、鎌倉公方足利持氏と室町幕府・関東管領上杉氏が抗争した永享の乱では、頼春の子・大森憲頼と弟の箱根権現別当の実雄は持氏に味方し、一方で、弟・氏頼

(信濃守)は幕府・上杉方に味方して、大森氏は二派に分裂した。公方足利氏と上杉氏の抗争が享徳の乱で本格化するとともに、戦乱は日常化した。享徳の乱も憲頼は公方の側に立ち、弟・氏頼とその子・実頼(信濃守)は上杉方に立って戦った。この間、憲頼は死去し、憲頼の子・成頼は扇谷上杉の執事・太田道灌によって滅ばされた。旧領は扇谷上杉に味方した実頼に与えられた。実頼は小田原城に移って相模西郡と駿河御厨支配の本拠にした。大森氏は実頼によって再統一されたといつてよい。

長享元年(1482年)に入つて上杉方の中心であった山内上杉と扇谷上杉の抗争が始まった。大森氏は扇谷上杉側に立っていた。この戦乱の中、前後して実頼が死去し、寄栖庵明昇と称して隠居の身だった氏頼も亡くなった。城主は実頼の弟・藤頼になったが、北条早雲によって滅ばされる。

崇仏の篤い家柄

大森一族は四散するが、大森氏が後世に残した業績の中で特筆されるのが仏教文化。武家時代は一般的にいずれの豪族も仏教に力をつくしているが、大森氏一門の帰依心は一段と深い。代々の当主は壮年の頃から仏門

に入つて法号・道号を称している。三代城主・氏頼の寄栖庵明昇をはじめとして、初代頼春は道光、四代実頼は不二庵明厚を称し、また、数多くの寺院を建立している。この篤い崇仏心が「歴世温和な当主」(司馬遼太郎「箱根の坂」といわれる一因ではなからうか。小田原文化はよく「北条文化」といわれる。しかし、これも大森氏建立の寺院に今も伝わる寺宝等にみられるように、「大森文化」を基盤に発展し、拡大したといつても過言ではない。

大森氏の興亡と箱根権現

大森氏の小田原進出は、箱根権現の力によるものであり、また、大森城主の小田原城落城も箱根権現の影響による。小田原大森氏の盛衰は、全て箱根権現つまり、その別当(住職・長官)によって左右されたとも言える。始まりは「上杉禅秀の乱」で禅秀に追われた鎌倉公方・足利持氏を援けたのが別当・證実。

證実は、箱根山の箱根神社に伝わる「箱根山別当累世」によると、箱根権現の別当院である金剛王院東福寺の第三十六世の別当で、法印、僧正、後に大僧正になった人。相模に進出した大森頼明の実子で、小田原初代城主・頼春の弟。禅秀の乱では、

持氏を駿河の今川館に安全保護した後に、引き返して頼春と協力し、駿河の今川範政を巻き込んで禅秀を討伐した。大森氏は早くから箱根権現が持つ軍事的政治的な力を推察して一族の者を順次権現別当として送りつつ、権現勢力を掌握することに努力していた。大森氏は既に箱根山関所を管轄していたから、「一族の別当就任も、それと一体のものであろう。大森氏の発展そのものが、箱根権現との一体化と連動していたことが窺われる」(「おだわらの歴史」)。

別当系譜

證実後の箱根権現別当の系譜を見ると、證実→実雄(三十七世)→禅雄(三十八世)→海実(三十九世)→長綱(四十世)と続く。長綱は北条早雲の子・菊寿丸即ち北条幻庵(宗哲)のことである。この系図は「箱根神社体系」に掲載されている別当系図で、大森系図には禅雄の名前は見られず、別に長実の名前が載っている。

證実は、先述したように初代小田原城主・頼春の兄弟で、実雄は、頼春の子で二代城主・憲頼、三代城主・氏頼の弟。海実は、憲頼の孫・氏康の子・海実(法印、僧正)が大森氏の最後の別当である。

大森氏最後の別当になった海

実は、大森氏滅亡後も箱根権現の別当であり続け、菊寿丸、後の第四十世別当・長綱を育成した。長綱こそ、小田原北条氏の政治と文化の最高指導者であった北条幻庵である。長綱以降の別当は子孫(久野北条氏)が継承している。つまり北条氏も、箱根権現と強い絆を結んだことである。箱根権現によって小田原進出を果たし、また、小田原を追放された大森氏が、まさにそのことを教えている。

大森氏ゆかりの曹洞宗寺院

小田原の北西約6kmの久野・諏訪ノ原に曹洞宗寺院「阿育王山総世寺」がある。長享2年(1488年)、三浦義同(後に道寸を称す)が雲水姿で総世寺に保護を求めてきた。養父・三浦時高との不和から命が危うくなったためである。三浦氏は相模の東側に勢力を張っていた。総世寺は第三代小田原城主・大森氏頼が開基した。義同の母(上杉高救夫人)は当主の氏頼の娘である。義同にとって氏頼は外祖父にあたり、氏頼は当時、隠居して寄栖庵明昇を名乗っていた。義同は大森氏等の加勢を得て明応3年(1494年)に新井城を攻めて養父を討ち、三浦一門の当主となる。

大森一族の崇仏心の篤さはよ

く言われるが、その顕著な例が曹洞宗寺院の建立である。総世寺の開山は安叟宗楞禪師。初代小田原城主・大森頼春の弟で、箱根権現第三十六世別当・證実は兄にあたる。大森氏一族から僧籍に入った人物は多いが、寺院の建立や再興が目立つのは、安叟禪師と氏頼の時代である。

大森氏は駿東時代には浄土宗に帰依していたが、大森頼明が箱根・相模に進出して間もない応永元年(1394年)に大雄山最乗寺を建立し、これを機会に曹洞宗に移った。この時代、禅寺は学林(学校・塾)に相当し、僧を教えるだけではなく武士達に教養をあたえる場でもあった。禅寺を興すことは文教を盛んにすることに等しかったのである。安叟禪師が後年、最乗寺第十世となって入山すると、氏頼は浄財を傾けて大増築して、最乗寺が曹洞宗門屈指の名刹に至る力になった。氏頼の崇仏事業は、伯父の安叟禪師が主として表面に立って建寺等に活動し、氏頼はその背後で支援・加護していたといえる。

大森氏は駿東から相模へ移住にあたって、必ずといっていいほどの土地に仏寺を造営している。深良の大森山西安寺(浄土宗)、霊亀山興禪寺(曹洞宗)、月光山松寿院(浄土宗)、御殿場市

の蔵春山宝持院(曹洞宗)、竹ノ下興雲寺(曹洞宗)、小山町の正福寺(真言宗・浄土宗)、鷹巣山勝福寺(臨済宗)、雲居山乗光寺(臨済宗)などが、その一例である。当時の寺院建築は壮大で境内は広く、地形の優秀な場所に建てられていた。軍隊の駐屯地、物資の集積地として軍事的意義を有しており、非常の場合は一種の城郭的意義(城郭的寺院)もあった。安叟禪師、氏頼の建立後も禪師の弟子たちによる曹洞宗寺院の建立が続いた。時代は大きく下がって、昭和25年(1950年)の大合併前の小田原市内の仏教寺院は98か寺を数え、そのうち曹洞宗は36か寺で一宗のみで三分の一を越えていた。大森氏の影響を証明するものであろう。しかし、大森氏は曹洞宗のみではなく、臨済宗、浄土宗、真言宗はじめ領内の諸派諸寺に対しても相当の保護を加えている。

乗光寺の大森氏墓石と位牌

静岡県小山町にある雲居山乗光寺の墓地に、大森氏の六基の墓が並んでいる。右から頼明、是妙、頼春、氏頼、実頼、藤頼で、是妙は頼明の室で頼春の母。夫婦のものがそろっているのは珍しく、頼明は「信詰大居士」永十二年乙酉九月十四日(14

05年)の銘があり、是妙には「是妙大姉応永二年八月十七日(1395年)」とある。頼春は「道光公菴主」の銘があり、氏頼は「□□□三年八月廿六日」と「明昇菴主」の文字が読み取れ、実頼は「淳翁明厚」、藤頼は「心紅道存」とそれぞれの銘が彫ってある。本堂には位牌があり、また、寺には「乗光寺記録」が残っている。ちなみに氏頼の法名は「寄栖開基日昇明昇菴主禪師」、「明応三年申寅八月廿六卒(1949年)」とある。これら位牌や「乗光寺記録」記載の法名と死去した年号は「駿河国新風土記」の記述と異なっているものも少なくない。そして、歴代当主の中で、二代小田原城主憲頼の墓碑が、何故か見当たらない。

乗光寺は、大森頼明が応安五年(1372年)に相模国足柄上郡平山村に浄光寺という寺名で建立したものを、江戸時代の正保元年(1644年)に現在の小山町生土の地に墓石ともども移して乗光寺と名付けた。乗光寺への移築に尽力した人物は大森頼直。頼直は徳川四代將軍家綱の幕臣で佐久間久七郎と称していた。徳川幕府の『寛永諸家系譜伝』の作成にも絡み、その後、本姓の大森氏に復し大森信濃守頼直を名乗った。頼直は祖先が

活躍した地の遺跡保存にも力を貸し、総世寺開山・安叟禪師の画像を修装している。大森氏没落後の浄光寺の荒廃を惜しんで、大森氏ゆかりの地の一つである生土に移して氏寺の再興をはかったのが今の乗光寺である。乗光寺には浄光寺ばかりでなく、大森氏が建立した各地の寺院の中で散在していた祖先の墓石も集めてある。

二代小田原城主憲頼の墓が乗光寺に無いことについて、こう伝えられている。頼直は第四代当主実頼の後裔で、二代憲頼は頼直からすれば傍系の祖先にあたる。自己の直系祖先の墓だけを故意に移したのだ——と。しかし、浄光寺の墓が全て乗光寺に移されたとは限らない。今尚五輪の頽碑残レリ、また、「此ノ地域ノ内ニ古墳三基アリ、大森信濃守頼春——ガ墓ナリト云フ、大半土中ニ埋埋シテ——」(相模国風土記稿)とあり、この墓石三基の主が誰なのか不明だ。小田原大森氏史上のナゾの一つ——とも言われる。

静岡県御殿場市にある蔵春山宝持院もその一つ。氏頼が娘の菩提のため、長禄二年(1458年)に建立した。法名は「宝寿院殿章子主尼大姉」、「康生乙亥年二月三日(1455年)」に死去した。梅が香にのつと旭が出

る山路かな——芭蕉の句碑が氏頼の墓の脇に建っている。乗光寺に見られる氏頼の墓はここにもある。亡くなった年月日は同じだが、法名は「玉峯院殿日昇月昇居士」となっている。

大森氏ゆかりの二岡神社・宝持院・長泉院・乗光寺・箱根神社等を訪れ、住職や神官の方々の話を耳にし、資料等を拝見した。あの時代の、一方では戦(いくさ)をし、一方では神仏に対する深い帰依心をどの様に解釈したらよいのかと、正直、戸惑いを覚えた。今、私たちは生命の危機感も無く、幸せに日常生活を過ごしている。この平穏な時代と比べ、当時の人々の日常生活への思いは一体どんなものだったのか。緊迫した生活観であったのか、あるいは戦略上の事であったのか——。とまどいと疑問は募るばかりである。

大森氏の場合、その動きがよくわからないと資料不足をあげる人がいる。資料という点では、江戸時代の小田原城主の古文書などは数多く残されているが、こと小田原の行事に関する限り北条氏一色。大森氏同様に大久保氏も稲葉氏も呼びでない。北条氏は戦国大名、文字通り一城の主であり、小田原市

としてはイベントに取り入れやすいのかもしれない。

そこで提案である。「大森氏ゆかりの寺社めぐり」といった、大森氏の冠(かんむり)を付けたイベントはいかがであろうか。小田原の歴史は北条氏ばかりではないのだ。

1、上杉禪秀の乱 禪秀とは、元・関東管領・上杉大憲氏(のり)の法号。応永23年(1416年)10月2日に鎌倉公方(関東公方)の足利持氏邸に夜襲をかけた。発端は、前年4月に氏憲の家人が大罪でもないのに所領を没収され、出仕を止められたこと。氏憲は持氏の法外な政道に憤慨して5月に管領を辞し、即座に出家した。相模の曾我、中村、土肥、土屋氏らが禪秀に付いた。

禪秀は新公方に足利満隆を立て乱は成功したかのようにみえたが、応永24年正月10日、將軍、足利義持が刺客を遣わし、禪秀は自害した。持氏の危急を救った大森氏に相模の早川庄の小田原の地が与えられ、大森氏は小田原へと進出した。(鎌倉大草紙)

2、永享の乱 永享10年(1438年)8月に関東公方(鎌倉府)・足利持氏が起こした謀反。正長元年(1428年)1月に將軍・足利義持が死去した。正式な後継ぎの氏名がなかったために、義持の弟四人の中から

籤で將軍を選ぶことになり、義教が六代將軍に決まった。持氏はこれを不満とした。関東公方は嫡子の元服の際、將軍の実名の一字を授かって命名するのが慣習であったが、持氏はこれを無視して嫡子を勝手に元服させた。持氏の謀反は公然となり、幕府と持氏の争いとなった。持氏は破れ、翌、11年2月10日に自刃に迫りやられた。この時、大森氏側は二派に分裂した。

3、享徳の乱 足利持氏の敗死で10年余りは空席となっていた関東公方に、文久5年(1448年)8月、持氏の遺子・成氏が任ぜられた。この間、管領(上杉山内氏)が鎌倉に権力を広げており、公方の権限と所領は大幅に縮小された。これを不満とした成氏は享徳3年(1454年)12月、上杉山内憲忠を謀殺し、幕府を敵に廻す結果となった。康正元年(1455年)6月、成氏は幕府によって鎌倉を追われ、下総に逃亡して古河(茨城県古河市)を御座所とした。古河公方の発祥である。

大雄山 最乗寺(神奈川県南足柄市)

創建・応永元年(1394年)開山・了庵慧明禪師、開基・大森頼明。慧明は相模国大住郡(現・神奈川県平塚市周辺)の生まれ。鎌倉の建長寺、丹波国永沢寺、能登国総持寺で修行、曹洞宗の「法嗣十哲」の一人。永沢寺等の住職を歴任したあ

と、晩年は相模に帰り、明徳2年(1391年)曾我の地に一庵を結んだ。

この時、相模進出のために政治的・宗教的な要害としての大寺院建立の必要を感じていた大森頼明が、再び慧明を世に起こして最乗寺を建立した。以後、慧明の弟子や後継者によって大雄山の開発は進み、最乗寺は多くの末寺を持つまでに発展した。慧明の俗姓は藤原氏。家系は明らかではないが、「大森氏一族の出身者」ではないかと推量し、調べを進めている研究者もいる。

最乗寺は俗に「道了さん」とも言われている。由来は、慧明禪師の弟子の「道了」が神通無双の大力で大木巨石を動かして寺院建立に大功をあらわし、応永18年(1411年)、ついに天狗になって虚空に舞い上がったともいう伝説による。

主な参考文献・資料

「大森氏関係資料 第一巻」第七巻(大森頼忠編・静岡県御殿場市立図書館蔵)

小田原大森氏同族会刊行書物(「六甲出版販売」神戸市)

「大森氏の興亡とその文化」(中野敬次郎・平成19年2007年)

「地方史に見る大森氏」(高橋村史・裾野市史・御殿場市史・小山町史・南足柄市史・小田原市史(平成12年2000年))

「地方史に見る大森氏」史料編・地

誌編」(御殿場市・小山町・南足柄市・裾野市)(平成14年≡2002年)
 「大森氏研究ほか史論集」(大森頼忠
 平成6年≡1994年)
 「大森氏諸系図」(内閣文庫)「大先祖
 書」(大森頼恭)

他多数

平成19年度

歴史観光コース三年五班

須藤タミ子 田中 秀幸

斎藤 良夫 富沢 秀穂

和久井千鶴

編集者からのお断り

本稿はおだわらシルバー大学
 生による自主研究論文を、筆者
 の御了解を得て転載させていただ
 いたものである。

誌面の制約もあって、詳細、
 長文にわたる論文全文を掲載す
 ることができず、やむを得ず主
 題である「大森氏の仏教政策」
 に沿った部分を中心に編集委員
 会で「要約」の形で整理させて
 いただいたものである。そのた
 め、原論文記述の少なからぬ部
 分をやむを得ず割愛したほか、
 多くの注釈、図版、写真なども
 割愛させていただいたことをお
 断りし、筆者ならびに読者のみ
 なさまにご了解頂きたい。なお、
 掲載文はすべて原文を使わせて
 頂いているが、要約の適否は全
 て編集子の責任である。

大森氏関係年表

- 応永元年(1394) 大森頼明、関本に最乗寺建立
 12年(1405) 9月頼明死去。墓・乗光寺
 23年(1416) 10月上杉禅秀の乱
 24年(1417) 禅秀の乱の功で大森氏小田原に進出
 28年(1421) 大森氏、飯田郷を二岡権現に寄進
 永享2年(1430) 箱根権現別当・證實死去
 3年(1431) 8月初代城主・大森頼春死去。墓・乗光寺
 4年(1432) 鎌倉公方足利持氏、小田原関銭を鶴岡八幡宮寄進
 9年(1437) 8月二代城主・大森憲頼、河村城攻める
 10年(1438) 永享の乱。憲頼、持氏側に立ち幕府軍と激戦
 11年(1439) 永享の乱終結。足利持氏、敗死
 嘉吉元年(1441) 安叟禅師(頼春の弟)海蔵寺建立
 文安2年(1445) 安叟禅師、総世寺建立
 5年(1448) 幕府、足利持氏の遺児・成氏を関東公方に
 享徳3年(1454) 享徳の乱。足利成氏、幕府に敵対
 康正元年(1455) 成氏、鎌倉を追われて古河へ(古河公方)
 長祿元年(1457) 足利政知、出京(堀越公方)
 太田道灌(扇谷上杉の執事)、江戸城築城
 応仁元年(1467) 二代城主・憲頼死去(墓不明)。応仁の乱
 文明8年(1476) 早雲、今川氏の内乱鎮定し駿河国へ
 10年(1478) 憲頼の長子・成頼、道灌に討たれる。三代城主大森氏頼の長子・実頼(四代城主)大森氏再統一
 11年(1479) 早雲、興国寺城の城主に
 15年(1483) 実頼死去。葬・清泉院、墓・乗光寺
 16年(1484) 安叟禅師、総世寺で死去。98歳
 長享2年(1488) 三浦義同、養父の謀殺計画逃れ総世寺へ
 延徳3年(1491) 早雲、堀越公方を滅ぼし葦山城主に
 明応2年(1493) 早雲、伊豆に侵攻
 3年(1494) 氏頼(寄栖庵)死去。葬・清泉院、墓・乗光寺
 三浦義同、新井城を攻め養父・三浦時高を討つ
 早雲、扇谷上杉定正と連合し、武蔵高見原で山内上杉顕定と戦い、山内上杉を退ける
 * 4年(1495) 早雲、藤頼を追い、小田原城を奪取。大森一族は真田城(神奈川県平塚市周辺)に逃れる
 7年(1498) 早雲、真田城の藤頼を追う。大森一族は四散、藤頼・頼宗父子は三浦義同を頼って新井城に投じる
 文亀3年(1503) 藤頼死去。墓・乗光寺

[*]「早雲の小田原城攻略は、通説では明応4年とされることが多いが、江戸時代の伝承である。明応5年(1496)7月まで小田原城主としての大森氏の存在が確認されている。早雲の小田原攻めはそれ以降であるが時期は不明で、文亀元年(1501)までの間とみられる」(「おだわらの歴史」黒田基樹)

小田原の郷土史再発見

小田原の梅干、始まりは粕漬けか？

石井 啓文^{ひろ ふみ}

はじめに

小田原の梅については、北条氏が奨励したとか、軍用として武家屋敷に必ず梅が植えられていた、などと言われているが、こうした話は、いわゆる「伝聞説」であり史料は全く見られない。

『農業事物起源集成』(大野史朗著・昭和十年刊)によると、

「梅干なる文字は王朝の頃には見えず、王朝末期よりポツ／＼見えて来たやうである。其の製法も王朝室町時代のものは今日の如きものでなく、單に梅の實に鹽をつけ日に乾したまでのものであった。尚當時は點心(間食・茶うけ)として用ひられたに過ぎないので、まだ副食物と云ふ程までには行かなかつたやうである。眞の梅干即ち梅漬にして日に乾して製するやうになつたのは元禄以後のことである。

彼の元禄十年の平野必大著『本朝食鑑』、正徳年間寺島良安著『和漢三才圖會』等には、この眞の梅干の製法が載せられてある。梅干に紫蘇を用ひて色をつける事は徳川中期の頃から行はれ初めたもの、やうである」とある。

中世以前は、烏梅^{うばい}(未熟の梅の実をいぶし干した生薬。色が黒く香気がある)に「むめぼし」と仮名が振られ、現代の塩漬けの梅干しではない。戦^{いくさ}に持参したと言われる梅干しは、種を除き紐を通して携行したとも記され、烏梅^{うばい}と思われる。

私は、小田原を通過した人たちの日記・紀行文・道中記など二百余点から、小田原の梅に関する記述を描出し、伝聞説を確かめてきた。今回、小田原梅の初見(文書に始めて見える)が遡れる史料を見出したこともあり、発表させていただく。

小田原名産「粕漬」は？

小田原の梅に関する記述を、年代順に描出してみる。

(1)『東海道名所記』 浅井了意 万治四年(二六二)

名物には小田原石、水道のために江戸に出し、あきなふ。小田原足駄、けやきのまる木履なり。夢想枕、又宿の右の方に外郎あり。東国海道第一の名物也。

(2)『小田原行』 高山彦九郎 安永五年(二七六) 九月十八日 我に安左衛門より當所の名産粕漬をいたす、十九日 小田原町東西二十丁南北五六丁粕漬を名産とす、

(1)は、名著として知られ小田原の名物を記しているが、梅については全く触れていない。江戸時代初期には、未だ小田原梅は製造・販売されていたとは言えない。

(2)は(1)の百十五年後。江戸時代後期の勤王家で奇行が多く、寛政の三奇人とも称された高山彦九郎の日記である。

彦九郎が小田原藩士柳井左京の墓前に香を手向けたく、九月十六日に江戸を出立し十八日に小田原に着くと、知人の伊藤安左衛門から名産の「粕漬」を贈られる。翌十九日、桃源寺(小田原市城山)で墓参りをすませ小田原を出立する際、小田原の町を紹介するなかで「粕漬」を再度名産と記している。二度も名産「粕漬」を記しているが、物は何であろうか……

この小田原名産「粕漬」は、梅以外には考えられないが、これを梅と立証できれば初見が二十六年も遡ることになる。

小田原梅の初見が遡る

名物とは記していないが、小田原梅を販売している初見が遡れる文書を見出した。

①『諸国道中獨歩行』 天明六年(二七六)

小田原よりはこねへ(中略) 右に城有▲うゐらう名物也かつおのた、き梅づけも賣なり。

②『東海道中膝栗毛』 十辺舎一九 享和二年(二八三)

ほどなく小田原のしゆくへはいると兩がはのとめおんな、梅漬の名物とてやとめおんなくちをすくして旅人をよぶ、(箱根宿で)おやじ「かうのもんはござらねへが、むめぼしよヲ進ぜますべい」ト、皿にある梅ぼしをいだす。

①が、今回発見した小田原梅の初見が十六年遡れる史料である。いろいろな名物とし、梅漬けも売られていると記している。これ

まで小田原梅を名物とする記述は、十九世紀になってからであった。この史料により、十八世紀後半には小田原梅が製造され、普及し始めていると言えよう。ただ、この梅づけが梅干しを言っているのかは分からない。

②が、これまで小田原梅を名物と記した初見であった。これも①同様「梅漬」と記している。箱根宿では梅ぼしと記しているもので、梅干しとは違うのであろう。

大久保忠真が粕漬小梅を献上

大久保家第九代小田原城主忠真は、文化元年(一八〇四)から粕漬小梅を毎年、将軍家に献上している。

③「献上之覚」

文化元年(一八〇四)以前

献上品の改訂を記した文書である。

二月は鮮鯛を「鮑糟漬」に、
六月は金地御扇子と干鰯を、

暑氣為伺御機嫌として「糟漬小梅と干鰯」に、
九月は葡萄を、「石橋芋」に、

十二月の蜜柑と鮮鯛を、十一月に鮮鯛をやめて「干甘鯛」に、
十二月は寒中為伺御機嫌として「蜜柑」

と大幅に改めている。

④『文化・文政武鑑』文化元年(一八〇四)～文政十二年(一八二五)

大久保安芸守忠真(文化元年の献上品)

〔時献上〕正月三日 御盃台竹二笋岩二藪柑子

二月 粕漬鮑

暑中 粕漬小梅・干鰯

八月 里芋

十一月 甘鯛披

寒中 蜜柑

⑤『方言修業金草鞋・東海道』十辺舎一九 文化十年(一八三三)

今日も早や火ともし頃となりたれば提灯の名の小田原につく、
○このところの名物は粕漬の青梅、鰹のたき、塩辛・提灯・
ういろいろなり、

③④⑤は粕漬けである。③は④の『武鑑』から文化元年以前と判断できる。献上品は、文化元年から文政十二年(一八二五)までの二

十五年間、毎年「粕漬小梅」であることが確認できるが、③から文化元年以前と文政十二年以降、将軍家への献上が終わるまで続けられていたと推察できる。

⑤で十辺舎一九は今度は「粕漬の青梅」と記している。①②からも小田原の梅は、始めは「梅干し」とは称しておらず文化年間には粕漬けが主流と思える。

十辺舎一九は、小田原梅の恩人

文政から天保時代になると、紫蘇巻や梅干しが見えてくる。

⑥『甲申旅日記』小笠原長保 文政七年(一八二四)

三月、小田原の城主大久保のぬしより町奉行某をして、紫蘇包の梅一捲給はりぬ。此の所の名産にて、此の梅と松魚の肉醬なん売る家多し。

⑦安藤家文書(沼津市大平)

大平村 安藤保左衛門殿

年未詳(文政九年か)

猶以小田原美濃屋二而

一鰹たき 拾曲

一しそ巻小梅 貳曲

一粕漬小梅 五曲

若無之候ハ、紫蘇巻小梅皆五拾文宛

右年頭之節為調候様御申付可有之候以上

⑧『箱根山七温泉江之島鎌倉廻金草鞋』十辺舎一九

天保四年(一八三三)

湯本・小田原 わしハさつきにから、況で頭痛がしてなりませぬが、人のいふにハ頭痛にハ、両方の小髻先へ梅干をはるがよい、(後略)

⑥は紫蘇巻梅、文政時代になって始めて梅干しが名産と記される。⑦は紫蘇巻小梅と粕漬小梅で、「美濃屋吉兵衛商店駅前店」に、表装して飾られている古文書である。年未詳であるが、関連する文書から旗本・大河内善兵衛(千二百石取、盗賊並火付御改)家からの文書で、文政九年(一八二六)前後と比定されている。安藤家で江戸出府の際「小田原美濃屋方で紫蘇巻小梅などを購入して欲しい、年始廻りの贈答品に用いる」と記している。この文書から、小田原梅が贈答品に用いられていることが知れ

るが、この注文でも粕漬けが紫蘇巻より多い。

⑧で十返舎一九は三度目の小田原梅の記述である。「湯本・小田原」の項で、頭痛などに梅干しを小鬢に貼ることの効能を面白可笑しく説いている。すでに、梅干しが一般に相当普及していることが知れ、一九には梅干しと言え小田原、がイメージされていたのであろう、小田原梅の恩人である。

『相模国風土記稿』と『國産考』

『風土記稿』は梅実で、何故か梅干しを記していない。

⑨『新編相模国風土記稿』 天保七年(一八三六)

足柄下郡 圖説

◎土産 ○梅實 小田原宿の産

足柄下郡早川庄小田原宿

⑩『諸国道中袖鏡』 岡田屋嘉七外編 天保十年(一八三九)

右に城有。ういらう名物也、鯉のた、紀、梅つけもうる也。

⑪『國産考』 大蔵永常 天保十三年(一八四二)

梅を植て農家之益とする事、

小田原名物の紫蘇巻梅は、右の如く青漬けにしたるを(後略)

⑨は梅実を小田原宿の土産とし、「塩蔵または粕蔵する」とある。梅干しは未だ名物にはなり切れていない様子も窺える。

⑩は①と同文である。①に「天明六丙午年刻成、文政十丁亥(一八二八)再校」とある。⑩は①の再々校と言えようか。

⑪が大蔵永常の著作である。小田原の紫蘇巻梅の製法を記している。おそらく、彼は小田原に来てその製法を調べていったのであろう。梅が農家にとって益になると奨励している。

始まりは粕漬けか？

⑫『東海道宿村大概帳』 天保十四年(一八四三)

一、此宿透頂香といへる葉并鯉のた、き・粕漬の梅・挑燈を商ふ、是ハ此所の名物なり。

⑬『下田日記』 川路聖謨 嘉永七年(一八五五)

十月、梅干も買い申し候。幸いに梅干は、先格にて大久保家より贈り申し候。わずかに梅干一曲、地獄にて仏に逢えるがごと

し。

⑭『旅中日記』 加藤祐一 安政元年(一八五四)
十二月三日、小田原ハ梅干名物なり。

⑫は「粕漬けの梅」、⑬⑭は梅干しである。嘉永年間に入って現代でいう「梅干し」が一般化したように窺える。

以上○数字十四件の史料は、①②⑩は梅漬けとあるが、塩漬けであろうか。③④⑤⑦⑨⑫の六件が粕漬けである。紫蘇巻梅干しが⑥⑦⑨⑪で、⑧⑬⑭の梅干しを含め七件が塩漬けであるが、梅漬けを除くと前半に粕漬けが多く中間の⑦⑨が両方を記し、後半に塩漬けが多い。粕漬けから塩漬けに変わってゆく様子が窺える。

天正十八年(一五九〇)、秀吉の小田原攻めの際、黒田勘兵衛が和平交渉で豊臣方から北条方へ、粕漬けの鮓が贈られている。冷蔵庫のない時代、保存食は塩漬けの他に粕漬けがあった。酒は古代から作られており酒粕も当然古くから利用されていた。小田原梅干しの当初は、粕漬けだったのではないだろうか。

おわりに

高山彦九郎の日記『小田原行』の成立は、安永五年(一七七六)である。今回、小田原梅の初見を遡らせた『諸国道中獨歩行』より十年早く、『東海道中膝栗毛』よりは二十八年も早い。彦九郎は、二度目の小田原名産の紹介でも「いろいろ」を記さず「粕漬」のみである。「粕漬」と記せば「小田原の梅」であることが充分知られると承知したのであろうか？

それ以前の史料を見出し、高山彦九郎の「粕漬」が梅であることを立証したいものである。

現在、本会特別賛助会員の神尾食品工業(株)では、大久保忠真が献上した粕漬小梅を復元し、小田原梅の発展に寄与すべく努力されているという。現代の私たちの食感に合うことを願っている。

なお、この論考は『扣之帳第十二号』(三〇〇六)に収載したものに、新たな史料二点を加筆、再編集したものである。

また、今回発見した史料『諸国道中獨歩行』は金沢文庫蔵、『諸国道中袖鏡』は、杉山博久氏所蔵文書(解説文は同氏著の『浮世絵師と歩く五宿の旅』であることをお知らせし、ご協力に紙面をお借りして御礼申し上げます。

曾我丘陵のふもとにあった

田島人形芝居と「遊楽連」一座

野地芳男

はじめに

明治時代の農村部では、娯楽として素人芝居などがはやり、村々で、若者が中心になって組織化され、それぞれ村ぐるみで盛り上がっていた。

そのうち、「田島の人形芝居」は、地元の足柄下郡田島村ではもとより、西相模地方で広く評判をとったイベントであって、近隣の仲間意識を深め、近村との交流にも大きく役立っていた。しかし、大正期に入ると、人氣はほかに移っていつて、後継者も細り、あの感動の舞台を観ることはできなくなった。

今では田島人形芝居そのものが、地元の古老や、座員であった家族の人達でも忘れ去られようとしている。田島に人形芝居があった事を知る人は僅か数人にすぎない。その歴史を消してしまつてはならない。

僅かな資料と、当時の座員の口伝をたよりに、残されていた「田島人形」を供にして「素人」による田島人形浄瑠璃芝居の足跡をたどってみた。

田島人形が有形民俗文化財に

明治時代に盛んであった田島村の素人による人形芝居は、大正期に廃れ、人形、衣装ほか諸道具は、稽古場だった真言宗金藏院に保管されていた。

金藏院が関東地震で倒壊したので、人形芝居関係者で分割保管するようにしたが、太平洋戦争などの混乱で、多くは破損、虫食いなどで廃棄、焼却などされてしまった。

昭和二八年に、一部が、実際に人形遣いをしていた座員の野地勝造氏の蔵から発見され、同氏は、同僚だった座員と同行、小田原市に保存を要請した。

昭和三七年、小田原市が寄贈移管をうけ、郷土文化館に収蔵されていた。カシラや芝居道具類は大きな茶箱に、当時のままの状態で保存されている。

時をえて「田島人形」は平成一八年二月二七日に、小田原市有形民俗文化財に指定・登録された。保管状態のよいものから指定されている。

内訳は
人形のカシラ 十九点
胴串 一点
衣装 二点
の二十二点である。

郷土文化館蔵の田島人形の一部
文七(ヒーローの代名詞)、娘、婆役のカシラが多いのは、分割保管の経緯からきているのだから。

カシラ(一)



カシラ(二、三)



カシラ(四)と胴串



カシラ(五)



衣装



田島人形が文化財に指定されたのを機に、田島歴史同志会の呼びかけで、二十名の方々が郷土文化館にて人形のカシラ等を観賞した。真の郷土文化遺産のすばらしさを会得し、田島人形芝居に深く関心を示して頂いた事は大きな収穫であった。

阿波人形芝居と相模人形芝居

かつて相模地方に伝えられた人形芝居で、最も活躍している一座に「下中座」がある。下中座は江戸の中頃、上方の人形遣いから教えられたと言われる。その後、明治中期に吉田金花・駒十郎の父子が相模地方の人形芝居の指導に当たった。更に、厚木の長谷座や林座を加えて、昭和二十八年「相模人形芝居」として県の無形文化財に指定された。

鉄砲差しのカシラの三人遣いは、西相模特有のかたちで「相模人形芝居」と名付けられた。そして昭和五十五年には相模人形芝居連合会が結成され「国の重要無形民俗文化財」に指定。

また、昭和五十七年平塚市の前鳥座と南足柄市の足柄座が県の無形文化財に指定されている。

田島人形芝居のはじまり

明治初期、田島村に素人による人形芝居の一座が結成され

た。その名を「遊楽連」という。その経緯をたどってみよう。

田島村には、江戸時代から村人が「火手芝居」と名付け親しんできた素人田舎芝居があった。当時は、村祭りなどでの村をあげてのイベントであり、火出芝居は娯楽の花形であった。

田島に電灯が入ったのは大正期で、明治期には村には電灯は無かった。その頃の田島の山には松林があり、村人達は松ノ木の根っこを燃やし「灯火」として使っていた。松ノ木の根には「ヤニ」が多く含まれ、長い時間燃やし続けることができた。この松脂の含まれた「根っこ」を村人達は「ヒデ」と称して、芝居公演の明かりや燃料に使っていた。そこで村人はこの田舎芝居を「火手芝居」と言い、若者達は夜な夜な集い「ヒデ」を燃やして、芝居の稽古に励んだのであった。

やがて田島人形芝居が始まるのであるが、この時の事情が面白い。

明治初期、阿波人形芝居の一座が相模地方で興行するため田島村で宿を取った。その頃、阿波人形芝居の一行が、各村々を巡回興行しても人気が落ちてきていて、興業に失敗した座頭は、人形芝居道具一式を、田島の「火

手芝居」仲間に売りはらい、国に帰る旅費を工面した。たまたま座頭である師匠に恋仲の女性がで、座頭は恋仲女性とこの地を去っていったしまった。

そこで残された座頭の女房、吉田米吉(当時四〇歳位、通称お米さん)が、田島村の田舎芝居の素人衆に、難しい人形の手解きやら稽古を教えて、「遊楽連」として一座がうまれたと云うのである。

最初に人形浄瑠璃を習った人達
境集落から石井喜十郎・野地
団次郎・石井角次郎
河原集落から伊与田直次郎・
石井市太郎
堂の前集落から野地十太郎・
小島今右衛門
根岸・丹沢集落から石井万吉・
下川平太郎 等

特に、野地十太郎の「熊谷」が「遊楽連」の座員であった。これは本職の人形遣いよりも、上手で見事であった。また石井喜十郎は三味線を上手に弾いた。

阿波の人形浄瑠璃芝居は、人形遣いと三味線弾き、それに義太夫の語りが一体となった芝居である。

人形遣いは、カシラと右手を操る主遣い・左手を操る左手遣い・足を操る足遣いの三者で構

成されている。一つ呼吸で、義太夫の語りと三味線に心を合わせる芸は年季を積まなければ出来ない。昔から人形浄瑠璃芝居の人形の遣い手は「足八年・左手八年・カシラ一生」と云われ、素人には厳しい修業が求められた。形が演ずる姿に、人間の喜怒哀楽の優しさ・美しさを巧みに表現するには何度も何度も稽古が必要である。当時、浄瑠璃義太夫は国府津から通っていたようであるが名前が分からない。

次に、観衆が注目する「カシラ」のことである。これを作る人が人形師。既に江戸中期には人形の口が開き、指が動き、目が閉じる人形が出来ていた。明治時代に入り、阿波には、人形富・人形忠・大江順等著名な人形師がいた。この頃阿波人形は、全国の人形浄瑠璃界に人気を博していた。

田島人形の「カシラ」の中には、三々四点優れた「カシラ」があったと伝わる。特に松王は文化三年正月吉日と記されていたとい、江戸時代末期の名匠といわれた人形師・駿府中島屋長兵衛作と言われている。これらの人形の「カシラ」は郷土民族芸能を学ぶ上で貴重なものである。

主な芝居の演目

弁慶上使の段
阿達が原三段目
大公記十段目
番町皿屋敷
阿波の鳴門
壺坂靈驗記
朝顔日記
一の谷熊谷陣屋
佐倉宗十郎
野次喜多 等
であった。

遊楽連一座の公演

田島「遊楽連」一座の公演は、地元をはじめとして、近村のお祭りなどにも出かけた。行先は主として、箱根方面は湯本・塔ノ沢、南足柄方面は矢佐芝観音?・岩原・塚原、また秦野方面は寄・柳川等であった。

人形芝居道具一式を茶箱等に入れて大八車に積み、田舎道をゴト・ゴトと音を立てながら引っぱり目的地向った。到着しても舞台準備に忙しい。

いよいよ開演である。演題は傾城阿波の鳴門、巡礼歌の段

：「物語」：

十郎兵衛と妻お弓は、盗まれた主君の名刀を取り返さなければと、可愛い娘を人に預けて国を出た。ある日、妻お弓の前に親を探す巡礼姿の娘

が現れた。我が娘お鶴であった。十郎兵衛とお弓は追われる身であり、名乗る事もできず母お弓は娘お鶴を追い返す。しかし再び会えないと思いいなおして後を追う。入れ違いに借金返済に困った十郎兵衛がお鶴を連れて戻ってきた。我が娘と知らず、お鶴の小判をとろうと窒息死させてしまう(阿波の人形師と人形浄瑠璃 芝居―須藤茂樹著より)

いずれの名場面でも、観衆から大きな拍手やヤジが飛ぶ。最高潮の場面になると観衆は皆なボロボロ涙を流す・・・会場が静まり返る。浄瑠璃義太夫の特有の声と三味線の音が巧みに合う。まさに舞台と会場が一体となつて人形芝居の中に溶け込んで行く。

その感動が人々に伝わる。まさに人形浄瑠璃芝居の世界だ。

素人の「遊楽連」一座の中でも、人形遣いである石井万之助の「阿部の定藤」、川口数平の「八幡太郎」、野地善蔵の「餅平衛」等の演技は絶品であった。そして石井勝之丞は三味線を上手に弾く人だった。興業の謝礼金は花代として四〇五円程のご祝儀を頂いた。

この花代から「花返し」と称して、一座から姫子饅頭や寿司

を振舞った。いつも人形芝居が行われる場所には、寿司屋・姫子饅頭屋・芸者屋・博打場があり、おのずと各々に連絡が取られていた。特に、田島の人形芝居芝居「遊楽連」の時は賑やかであった。

博徒の親分衆には、田島の多古金・小田原の集月・藤沢の金子・保土ヶ谷の半鐘金・松田の麴屋・鴨宮の弥三郎がいた。当時の親分はいずれも村の実力者であり、小作人や貧乏人が名主などから金を借り、返済に困ると親分が代わって支払ってくれた。それ故、地域の住民や名主にも一目置かれていた。

人形芝居全盛期には田島にも芸者置屋があり、当時は「天王地屋」という料亭があった。それだけ賑わった。そこは境集落の野地勝造宅の裏側、津島神社の東側に位置するが、今はその周辺は梅林で、当時の面影は全くない。現在でもそこは「料亭林」という古地名でよばれている。

明治時代後期の遊楽連

田島の浄瑠璃芝居も年月を重ね、「遊楽連」一座の芸道も次第に充実してきた。遊楽連の座員も次第に代わり、やがて師匠は足柄上郡山北町の坂東滝三郎氏より習うようになった。

芸統は阿波の流れから、江戸系の「人形遣い」関東の鉄砲ざしに移り、人形の頭(カシラ)が次第に大きくなってきた。

「鉄砲ざし」とは人形のカシラと心串の取付けで、頭を中心線と心串の角度が二〇度ある。そのため垂直に立てて顎を上げると顔が仰向けになる。そこで顔を真正面に向けるため、心串をやや斜め前方に倒して握ることになる。この手首の形から「鉄砲ざし」という。

有形民俗文化財の指定を受けた田島のカシラは鉄砲ざしが多く、芸統の流れを裏付けている。

この頃の遊楽連座員は、河原集落の伊与田茂三郎、境集落の石井萬之助・野地勝造・石井八五郎・野地吉五郎・伊与田亀次郎・鈴木秀次郎、堂の前集落の川口数平、根岸集落の中村浦太郎、その他二三人の青年が習っていた。

稽古は金蔵院等で何度も稽古を重ねたようだ。この頃は「遊楽連」の活動も盛んであった。

しかし、大正時代に入り、河原集落の石井勝三が、最後の人形遣い石井萬之助(境集落、昭和四一年卒)等に人形芝居を学ぼうとしたころは、座員は少なくなり継承もママならなくなってしまう。

人形芝居は、稽古もさること

ながら、芝居用具に費用がかかった。その上多くの手間と時間を要した。多忙な農家の人達には稽古も儘ならない。人形は共同で購入した高価なもので、仲間以外には貸さなかった。そのようなことから、青年達の興味は次第に素人歌舞伎や琵琶に移り、人形芝居は次第に忘れられていった。

人形芝居の存在意義は大きい

特に、村の諸年中行事の中で、人形芝居は地域住民の大きな楽しみであり話題性に富んでいた。人形遣い・三味線弾き・義太夫語りは誰もが知っている村人であった。加えて素人演技がより共感を呼ぶ。会場も村を上げての一体感で盛り上がった。座員である堂の前(集落)の十太郎さんが操る人形遣いは年季があるとか、境集落の新造さんの三味線の音がすばらしい、あの芝居には泣かせられた・等々、話題は尽きない。そこには村人達に共通な話題が生まれ、日々の共感を呼び相互の交流を深めていった。

更に、近村の人々との交流がある。人形的一座が訪れた各村の人達は、村の行事として、一般の人々はオヤツ・御握り・駄菓子などを持参、入場無料で参加する。村の有力者や有志が、

「ご祝儀とか花をかける」と称し、舞台正面の左右に

「一、金〇〇〇圓也」と大きく貼り出される。表示額は通例として三倍程の金額である。これを見ながら、村人達は、ひそかに「スゴイ・スゴイ」と囁きながら喜び合う。段々と芝居会場は開幕を前にして盛り上がってくる。夕日も西に傾くと、舞台の中で拍子木がパチ・パチ・パチ・と鳴り、やがて幕が開く。会場のざわめきが止み、静かな芝居の始まりとなる。観衆の目が舞台に注がれ、総てを忘れた嬉しい顔、顔である。まさに役者と観衆が一体化した時である。こんな時には、子供達の泣き声も止むから不思議である。

人形芝居の芸は、共感と人間が演ずる以上の優しさ、美しさを見せてくれる。喜怒哀楽・共感の世界に埋没する。村人が演じて、村人が観て、芸の深さを味わう・そこから人々の明日の暮らしが始まる。当時の人形芝居が日々の暮らしに果たした役割は大きい。

後世に伝わる人形師と人形芝居

江戸時代から明治時代にかけて、四国の阿波には阿波人形木偶作り「人形富」(通称は川島富五郎)という人形師が住んでいた。この人形師は几帳面な性格

から、精巧な細工をしたカシラを作りだした。その弟子が人形師「天狗久」である。この人は「人形作り」の名人と称され、世界一と自称していた。面白いことに、屋号は「天狗屋」、店の看板は「世界一」と掲げていた。「天狗久」(通称は吉岡久吉は波に乗り、数多くの作品を世に出した。その作品数は数千に及ぶと云われている。カシラを目立たせるため大型化し、軽量化するため桐材をつかったり、暗い照明でも睨みがきくようガラス目にするなど工夫した木偶人形は、この頃の「天狗久」のものである。

宇野千代の小説「人形師天狗屋久吉」から一途なその人となりを知ることができる。

明治時代の多くの人形は阿波人形師の里で作られ、全国各地の人形座で使われていた。これらの人形は「笑い・涙・感動」の場を演じて、庶民の心を捉えていた。

後記

今回、田島人形芝居(遊楽連)の調査には、当時の資料や文献が少なく、地元の郷土史家・杉崎正五氏および三津木國輝氏により資料と情報提供を頂き感謝申し上げます。

特に、阿波人形浄瑠璃の研究

家・松下師一氏には諸資料とアドバイスを賜り厚く御礼申し上げます。地元の古老および郷土文化館の多くの方々のご協力にて、ようやく田島人形芝居(遊楽連)の概要が解き明かされてきました。

内容等の不十分な点はご容赦いただき、人形芝居に関する資料や情報を賜れば幸いです。

主なる参考文献

阿波と淡路の芝居をめぐる歴史像 松下師一

徳島・淡路と鳴門海峡

石躍嵐央一編 平野博

浄瑠璃への道

小田原の文化財・同追補

小田原市教育委員会

阿波の人形師と人形浄瑠璃芝居

須藤茂樹

地元郷土史家資料

杉崎正五

同 三津木國輝

田島人形芝居の座員野地勝

蔵・石井万之助(筆者の伯父 両氏からの聞き取り資料

〈著書紹介〉

野地芳男

普段着で地元の庶民史を追う、田島歴史同好会会長。

「西相模共和国」で半生を過ごした、謎の風外禅師に入れ込む。

小田原の商店街

史料委員会

5、多古・井細田商店街

この商店街は、第二次世界大戦中、近隣の富士フィルム、ユアサ電池の工場が空襲を受けたが戦火は免れ、町並みは戦争前と全く変わっていない。このことが終戦直後の他の商店街に比べ、復興に対する気概において大きく出遅れた要因のひとつとなったのではないだろうか。

しかしこの商店街も、いち早く多古・井細田商店会を結成し活動を開始した。初代会長は大川瀬戸物店の大川喜助氏であった。商店会が結成された年月は、当時の資料がなくはつきりしないが、毎月のように地藏堂(写真二)に集まって商店会の発展の方策を検討した。私(山口博司)

は発足当初、中元売出しや歳末売出しなどの、三角くじを商店会の全員が手作りで作るなど労力を惜しまずに協力したことを覚えて



昭和二十四―二十五年頃、本柱の防犯街路灯を二十一―三十メートル間隔に二十六本設置して商店街を明るくしたこともあった。この頃は、中島に青果市場があり富水、坂下、久野、穴部、飯泉方面の農家が生産物の出荷でこの商店街を通ったため、一般の通行人も交えて往還は大変にぎやかだった。

昭和三十年頃希望する十数店で各店の屋上にネオン看板を設置した。鉄枠で高さ百五十センチ、幅六十センチの大きさでそれぞれ店の名を赤、緑、ブルーなど色とりどりのネオンで輝かせた。このネオンの看板については他の商店街からも見物に来たものであるが、十年ほどで自然消滅してしまった。この看板の電気工事は、商店街の清水電気店が行ったが、当時一基一万三千円ぐらいだったと記憶している。

この頃の商店街は店数も多く、ある程度の賑わいを見せていた。

昭和三十九年一月十五日に国道二五五線の飯泉橋が拡幅して開通すると、自家用車も増え商

店街は一日に二万台を越す交通量に悩まされ、渋滞で買い物もおちおち出来ないようになって



しまった。昭和四十年に入り木柱街路灯も時代遅れとなり、鉄製の街路灯に切り替えられ、設置場所も増やし三十二本とした。(写真二一基二万九千円で、県市からの補助も受けられた。

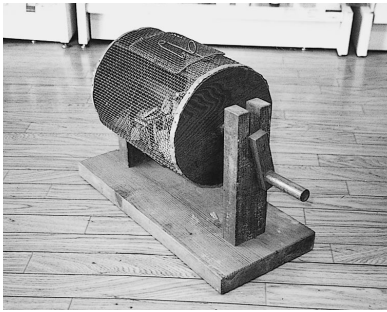
そして、集客事業の方策としてニコニコスタンプ会を発足させたが、これも十年足らずで廃止された。手を替え品を替えての集客活動も徐々に客の減少をきたすようになり、さらに商業活動の大幅な規制緩和によって、大型店の出店が相次ぎ価格破壊競争も激しくなり地方商店街を疲弊させた。

昭和四十六年七月に国道二五

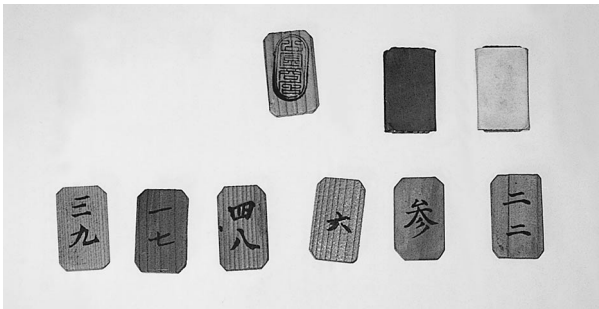
五線井細田バイパスが開通すると、この商店街の商圏は完全に二分され顧客の半分を失った。さらには、昭和四十七年に中島の青果市場も移転し、鴨宮に小田原市公設青果卸売市場が開設されると往来も減少した。



この商店街の大きな特徴は、卸問屋が数多くあったことである。加藤糒や、茶利雑貨量表、村越雑貨、竿由釣具、山一化粧品雑貨、大川瀬戸物、立花茶、などなど錚錚たる問屋が軒を連ねていたものであるが、現在ではその大半が姿を消している。



大正11年にヤマキン洋品店が作成して使用したガラガラ抽選の道具



ガラガラ抽選に入れたコマ。
木札で造られ、裏側に山口商店街の焼印がある。

昭和五十二年七月から街の活性化を目的に前年に廃止された小田原市役所足柄支所跡地(写真三)で盆踊り大会など実施したが、それもすぐに跡地の使用ができなくなり現在では足下地藏尊の縁日に商店会行事として、地藏祭りを実施している。平成になって商店街の店舗は三十数店である。

(この記録は山口博司さんの文章を史料委員会が一部直したものです。)

調査に協力下さった方
山口博司氏(ヤマキン洋品店)
山口美知子氏(ヤマキン洋品店)
加藤公明氏(加藤兵太郎商店)
本多純二氏(ホンダ時計店)
今井栄一氏(今井精肉店)
星野敏郎氏(八百吉)

写真一の「地藏堂」の話
この「地藏堂」は、足下地藏として近隣に名を知られており文字どおり、台座から片足を下げた姿の地藏尊である。稲葉正則が寄進したという。板橋の地藏尊同様、古くからあるらしい。今は商店会の人たちが管理しているが、第二次大戦後の一時期、四国から来たという僧が在住していたこともあったという。また、この「地藏堂」の入口近くに湧き出している「延命水」ということで、遠くから汲みに来る人もいたという。(鳥居記)

井細田商店街(その2)

この奥 長安寺 門	山王川									
	鈴木タンス店	安藤菓子店	佐藤自転車店	米谷衣料	中川畜産KK事務所	田浦湯				
大 橋	小田原ケンネル	磯崎たんす店	OSタイヤ商会	上原八百屋	大阪屋製粉	中島自転車店	大西靴店	棒屋(刃物店)	本多時計店	小田原プロパン
	菅菓子店	鍵和田畳店	小泉銅肥料店	小川商会	佐藤自動車修理	横溝農具店	瀬戸鉄工所	鈴好桶店	杉山ポンプ	三光興業
	魚彦魚店	藤枝農具	菊池食料	ハダノヤ食料	小澤綿・ふとん店	進藤クリーニング	農具・古川作業場	瀬戸折箱店	平塚タバコ店	ふさのやパーマ
	白金屋菓子店	立花茶店	大阪屋製粉	大坂屋菓子店	梅林無線	杉山ポンプ商会	岡部理髪店	高橋薬局	長谷川折箱店	小澤綿・ふとん店

小田原の下町回顧

剣持芳枝

私は大正末期、旧唐人町の材木屋の末娘として生まれました。

昭和三年、昭和天皇のご大典の折は、町内中紅白の幕が張られ、奉祝ムードで賑わっていたことを、おぼろげながら記憶しています。その頃はまだ小田原は町でのんびりと平和な暮らしでした。

私の実家からはすぐ近くの青物町は、小田原でも一番の繁華街であつたようです。月のうち十五日には松原神社を中心に「明神市」が立ち、宮小路から青物町にかけて夜店がずらりと並び、綿菓子、甘い香り、大きな鉄鍋で炒る銀杏の香ばしい匂いが漂う夜店を見て歩いた楽しい思い出は、何時までも忘れられません。

青物町の大通りを少し横に入り路地を歩くと、其所は今では考えられないような、時折り三味の音が何処からともなく聞こえてくる粋な路地でした。

お稲荷さんには昼間から灯明が点されていました。

私の小学校時代の友人に置屋

の娘さんが居て、仲良しだったのでよく遊びに行きました。

きれいなお姐さんが四、五人居て、暇な時にはお手玉やおはじきで遊び相手になってくれました。夕方になるとお姐さん達は美しく着飾って、後ろから切り火に送られて出かけて行きました。子供心にも私は、そんな光景を見るのが好きでした。

友人は一人娘だったので私が遊びに行くとご両親も喜んでくれて、帰りに「また来て下さいね」と優しく言葉をかけて下さり、嬉しくなつてスキップしながら家に戻ったものでした。

女学校に入つてからは、念願の長唄の稽古に宮小路の坂東流日舞のお師匠さん宅に通い始めました。学校の帰りに稽古に寄るのが、それは唯一の楽しみでした。

宮小路にはその頃芸者さんが大勢居て、稽古通いによく会うことがあり、きれいだなと見とれてしまうようでした。当時には珍しく女学校出の芸者さんが一人居て、小田原一番の売れっ

子だつたようでした。

戦争がはげしくなると、稽古どころではなく休みがちになり、本当に残念で悲しい思いでした。その頃兄が召集されて戦地に赴くと、武運長久神頼みの明神様参りを毎日のように続けました。小さかった兄の子供達を連れて一生懸命拝んだのでした。まだ戦争の終わらない昭和二十年春には私は嫁いだので、明神様参りには行かれなくなつてしまいました。

終戦前夜の小田原空襲では、実家の隣まで焼けましたが、運良く実家は残りました。私は婚家の裏山の防空壕の中で東の空が真っ赤に染まり火花の散るのを見て、もう家は焼けてしまったものと思ひ、涙が頬を濡らしました。朝になって無事の情報を知り、飛び上がらんばかりに安堵の嬉し涙を流したのでした。

まだ馴れない婚家での暮らしは、敵機来襲に脅え、苦勞の連続でした。ですが八月十五日の夜から、家中電灯が点され、その嬉しかったこと、戦争時代を知る人でなければわからないと思います。

実家の向かい側の通りには内科医、歯科医、外科病院がありましたが、跡形もなく焼けてしまいました。ですが六十二年経

った今でも、私の脳裡にははつきりとその風景は残っています。

年をとつても生まれ育つた下町の風土は、何にたえようもなく懐かしいものです。

会員だより

新規加入

北村 悦郎

小田原市鴨宮一六七―八〇四六五―四七―三〇八九

須藤タミ子

久野二〇八―四三四―四六七五

岸 忠行

小竹一六一―四三一―八六四

譲原 智

小八幡三二二―七四七―七〇一五

和久井千鶴

飯泉二七六―九四八―〇六〇一

廣石不二江

米神四六三二二―〇五二九

菅野 俊雄

小竹八一八―一四三―四一三八

別生 憲一

扇町二七七―七三四―七一七六

秋山たづ子

飯泉九〇九―五四八―五六〇七

浅見 洋子

久野八七二―三三四―二三五九

佐々木幸恵

飯泉二六八―四四六―〇三三三

訃報

佐野 実

小田原市久野三四―一

片岡日記 ③9

片岡永左衛門

大正十五年五月

十日 晴
出勤。

十一日 午後より小雨

足柄下郡畜産会主催之競馬を去る九月より開始し、始メ小田原ノ有志ニ於て、競馬場を出願スルヤ、国府津も出願セシニ、縣ハ一郡一場の外ハ許可せざる方針ニテ国府津ト競争し結果長々紛議を重、遂ニ小田原より国府津側ニ費用トシテ、三万九千円を提供し、下郡ハ小田原一場となり以來初の開場なり。然共此競馬ハ公然の博奕なれば、父兄や家族非常ニ迷惑し家庭ニ風波を起す家も少からずと聞て、此為ニ町ノ料理やその関係の者ハ幾分利益の有べきも、公平ニ社会政策より考慮すれば危さ之物の開場なり。

十二日 晴

十三日 晴

十四日 晴

去る十二日より、追々寒く今日ハ厚き襦袢位にて寒く胴着を重て出勤。

十五日 晴

如電先生より来状に添て短冊と駅路辺を贈られたれば礼書の中に

贈られし駅路の文をひもときて

また偲るる君かおもかげ書中ニ貴説拝見、駅舎ハ此地と存し再刊訂正不為か、其地訂正之處あり、再刊御待執中是ハ古駅の小総駅なるハ小綾ノ誤字ト断定シ其地ハ、府中ノ千代トノ説なり。然共拙者ノ説ハ左ニ非ス、千代より下堀辺を師長国の廳舎在しなるへしとに雑誌ニ投書せしを先生ハ返て小総の駅跡となせしなり。此説の別る處に、歴史研究の面白みも又在るなり。

十六日

昨日より生木大黒天の縁日にて門前通行人多し。郡史ヲ急ニ編纂し度しとて、久野氏より拙者ノ小田原誌借用を申来りしも、訂正中なれば、一段落の上と申置き、世話しき中を執筆し、今日持参したるに、入用済なりと。人に借用を申込、不要なれば先方より来るべきに、余り馬鹿々

し。

十七日 晴

出勤。春來降雨少なく諸々井水も減少す。

十八日 晴

出勤。今日関利豊ノ談話ニ近來売春婦の大震後、近々増し目下ハ凡式百人も有り、其他芸奴も百三十人余ニ、娼奴も六七十なりと。

十九日 晴

午后二時曾我重造葬式ニテ会葬して

嬉しきも腹たたしきも君ゆきて

今よりのちはたれとかたらむ

氏ハ若年ニハ木挽をせしとか聞も、其後小田原ニ来り、材木商となり、傍ニ女郎屋もなし、後ニハ材木ニ戻り、諸々の山に關係し、町會議員ともなりしか、才氣有り重宝なりしか、是が又、短所にて、一部よりは奸物と思れしが拙者も助役當時にハ面倒なる事ニハ暗裏ニ援助させたれば示来懇意ニ交際したるも、晩年不幸にも、一人なる娘に養子せしに其娘も早く病死し、又妻にも先立れ、まことに氣毒の至りなりし。

廿日 晴

十時参拾分發ニテ、本店二行、四時帰宅。

廿一日 雨

酒匂ノ新橋落成式ノ招待より参列す。同橋ハ旧橋腐朽し、拾余万円ニテ漸々新ニ架橋せしニ数月にて震災ニ破壊し、今回は十四年二月に起工し、県下三大橋ノ一二テ、橋長百九十七間、工費百坪三百四拾九円、合計式拾七万四千百八十三円其他道路及雜費四万五千九百円ヲ要シタリト工事報告したり。

廿二日 雨

出勤。

廿三日 雨

牧野勝從氏、家中ノ都合ニテ、府下大井村ニ近々転居之由付晚餐ニ招待セリ。氏ハ年来ノ友人ニテ、町村制施行ニ際し、小田原町ノ助役となり、其後宮城県ノ農事試験所之書記に数年就職し、帰国後ハ小田原電気鉄道会社に入り、長年ニシテ、震災前に退職したるに、近年妻を失ひ、不便ノ為メ、二女の方に同居なす由、高令とて独身ハ同情に不耐。淳子東京に行く。

廿四日 時々雨

出勤。

廿五日 時々雨

夜半より甚大雨、今朝一時晴る。十時三十分発にて本店に行、二時半発ニテ帰宅。過来ノ雨ニ加ヘ今朝大雨ニテ酒匂も馬入も湯水満川。過日、或人より山吹の歌を、見せられしニ、余り感想も引さりしニ、今日ハ気車にて其山吹を思出して、夏もまた浅き野川にかけ見へて

色うつくしき山ふきの花

廿六日 曇

小田原中学校第二代校長

阿部宗孝先生

追悼録(2)

武田 敏治

小田原史談第二一二号に『阿部宗孝先生遺稿集・追悼集、思い出の陸柱』の概要を紹介させていただいたが、遺稿集には先生と親交の厚かった方や、先生の薫陶をうけた方々の思い出が数多く収録されております。

これらの文を読ませていただくと、文字を追うごとに明治、大正時代の息吹が彷彿と蘇り、その時代々々の背景が胸に迫ってまいります。

いずれも太平洋戦争中の昭和十九年に発刊の予定で寄稿され

出勤。

今日ノ新聞ニ、物ハ見様ニテ、何とも見へる。佐倉義民之木内宗吾も、税務局から見れハ煽動政治家と行ぬ迄も、民衆運動屋、佐倉ハ千葉家ノ旧領テ其残党が各所ニ有リ徳川時代にも旧税法其俣テ、堀田氏が新税法ヲ布タノテ、不平が勃発シ、宗吾が陣頭ニ立タノテ、今も納税成績が、全国中テ一番悪ヒトノ記事が有タガ、此千葉領ニハ面白ク無ハ、団結が自然に発達シタガ旧時代ニ伊勢ノ参宮同者ノ旅行にも、

千葉領之者ハ千葉ノ家紋月是ヲ笠印ニシテ中ニハ鳶口杖替りに持て、喧嘩腰ニテ、まことに人氣悪しく、道中にて好まれなかつた。

廿七日 晴

まことに寄りてふみ見て居れば、今朝もまた老ひうくひすの庭も世になく

廿八日 曇

出勤。夕刻およし見舞ニ来る。此程執筆之為暫く同家に行さり

しに心配して来る。

廿九日 半晴
出勤。

三十日 雨
朝より在宿執筆。

三十一日 曇

午後六時山田氏より○之○来リ。庭をながめながら地走ニなる。氏ハ造庭之趣味あり。執筆中ひま潰ハ少し迷惑なりしも是も人間の事。

たものですから、今日の世相と比べると違和感を覚える箇所も少なくはありませんが、それもまたその時代を反映した一つの資料であるとして、あえて原文のままいくつかを抜粋して紹介させていただきます。

追悼録には、多くの同僚、友人、教え子の文が収録されていますが、主として第三章の「小田原のころ」を中心に適宜選んでみました。また、原文はかな

り長文のものもあり、また追悼録の性質から遺族に対するお悔

そのため若干前後の脈絡が不明な部分もありますが、ご了承承頂きたいと思ひます。

なお、抜粋紹介した文は、「用字」、「かな使い」、「句読点」など、すべて「原文通り」とした。また、省略部分は「中略」「後略」と表記したが、一行前後の省略のついては「・・・」をもつて表示した。

「丹心」無限の追及

西 義頭

明治四十三年の四月であった筈だから、私は十四歳の中学一

年生、先生は、莊齡三十六歳の鬱勃颯爽たる校長先生であつた。小田原中学はまだ、神奈川県立第二中学校とよばれて、現在の小田原停車場の位置にあつた。・・・私が小田原において、先生から受けた薫陶の時間は、僅か二年にすぎなかつたのである。(中略)

いま小田原中学校の校門の前に、先生が私淑された山縣含雪公の筆蹟「丹心」が、碑刻されている。「丹心」という言葉は、先生の若き日に、熱情をもつてわれわれに吐露された言葉であり、先生御自身が身をもつて貫かれた哀情であらう。

先生の「丹心」とは、皇国の無窮に捧げられた赤誠である。皇国の無窮を念願追及して、老

いるところを知らなかったのが、阿部先生であったのである。(中略)

三十五年ぶりに突如として私の前にあらわれた先生は、また突如として無限の彼方に去っていかれた。・・・されどわれわれは、先生を追わなければならぬ。「丹心」の追及は、無限だからである。

小田原中学校長

木村繁四郎

余の初めて君を知りしは、明治三十四年四月に創立の小田原中学に、翌三十五年七月東文学部国史科を卒業された君が、首席教諭として赴任された頃からである。

同校初代の校長は、松陰先生の家系をつがれた吉田庫三君で、同君は、生徒の規律・校風の樹立をきわめて厳格に指導せられ、秋霜烈日の概があった。君は、その部下として十分に内助の功を挙げられたが、数年にして吉田君が関西の地方視学官に転任されたので、君はそのあとをうけて、第二代の校長となられた。

爾来中学教育問題や校務の打ち合わせなどで自然面晤の機会が多くなり、四十四年間の永きにわたり、親交をかたじけなかったのである。

小田原中学校の校風や生徒の規律は・・・君の時代になって、幾分の変化があった。

それは、君の性格の美点が、自然に発露されたからである。構内はいつも春風駘蕩の趣があった。運動会の余興なども、卑俗に流れぬかぎりは、生徒の希望を容れられたようである。教師の採用には、常に細心の注意を払われ、人格・学殖ともに優良な人を採用せられた。したがって生徒の学力は、年をおうて進んだように思われた。君の在職中、不慮の火災があり、校舎は全焼したけれど、県が御料地の御払下げを願ひ、現在の高豊閑静にして眺望もまた絶佳の環境に校舎を新築し、生徒の教養に多大の便宜が得られることとなった。(中略)

また大隈老侯は、全国中学校長会があると、参会の一同を早稲田の邸内に招き、午餐を饗せられる例があった。余は一度その席で、老侯が、その傍らにいた二、三子に小田原中学の校風の淳美なることを賞揚せられたのを、親しく聞いたことがある。その裏面で、君が人知れず、いかに苦心努力せられていたかを察して、心から敬意を捧げたのである。

由来小田原は、名流が隠棲される土地であり、君も永い間に

は、これらの人士とも親しく往来されたが、ことに山縣老公は、君の同県の大先輩として、親しく教えを受けておられた。余は時々君から、「山縣元帥がこのように申された」と聞くことも、しばしばであった。

また漢文学の大家井々居士竹添進一郎先生にも、教えを請われたと思う。

先生の晩年の傑作である乃木将軍とその夫人の殉死を詠ぜられた「雙殉行」の長編の書幅は、永く君の家に伝えられるべきものと信じている。(中略)

いま指を屈して当時の友を憶うと、横須賀中学の吉田庫三君、横浜二中の滝沢又市君、逗子開成の田辺新之助君をうししない、ついに君を哭するのは、惋惜の至りである。

追憶の師友

佐々井信太郎

私は小田原中学校在職十六年、衷心隔意なき師友としての阿部先生に対し、追憶切なるものがあると、かくいうぐらいの表現では満足できない。

はじめは同僚として、まもなく上司としてその指導誘掖のもとに、中等教育を職域として、いかに奉仕すべきかという以外には、地位も待遇も名誉も念頭におかない同志として、相より

相たすける親族以上の親友として、厚交を辱うしたのである。

中でも校舎が二度まで火災にあい、移転を余儀なくされるなど、先生は、心身を労されたのであるが、夜を徹しての協議処理、先生はその責任者であったから、おそらく一睡もされない日が多かったことであろう。それにもかかわらず、先生は案外泰然自若として、職員の心気の昂進に自我を鎮めておられた。(中略)

もつとも苦心され、名誉とされたのは、閑院宮春仁王殿下の御入学であらう。

小田原には、閑院宮の御用邸があり、常宮殿下や周宮殿下も、授業や運動会などに列席されたこともある。しかし御入学ということは、小田原中学にとって、まったくもって光栄の至りであった。しかしこれも先生の人格が、御親任を賜った結果であるとしか考えられない。

当時小田原には、御用邸に佐々木侯爵がおられ、板橋に山縣元帥、小田原に野村子爵らがおられ、先生は、これらの方々から信頼を受けておられた。(中略)

当時の学校は、現在の停車場のあった旧八幡山から煙硝曲輪の現在地に移転後であったから、宮邸からは、小峰公園にお

りて登れば、至近距離であつた。
(後略)

大陸の柱

早野 兵蔵

阿部先生にはじめてお目に会ったのは、明治三十八年日露戦争が、たけなわのころと思う。

・・・先生は、日露戦争後における女子教育の必要性を痛感せられ、小田原の有志の人々にはかつて、明治四十年に至り、現在の県立小田原高等女学校の前身である町立小田原女学校を創設せられ、当時小田原中学校の校長でありながら、小田原女学校の校長の事務取扱をも兼務されることになり、私もまた同校の教師として就職することになったのであります。

爾来先生を中心として、数名の職員が一体となり、学校の発展に尽力いたしました。幸いにも翌明治四十一年に至って、同校は高等女学校に昇格して、程なく専任の校長がみえることとなり、先生は専ら中学校の経営にあたられました。(中略)

先生は、誠に情味厚く、後進を導くにやぶさかならずで、一度接近したものは、どこまでも面倒を見るといふ大度量を持っておられました。所謂「親分肌」の感がありました。

学校の卒業生といわず、私の

知る範囲の人々は、いずれも先生をお慕いしておりました。

また先生は、国士の感があり：若人に向かつては、つねに「大陸の柱となれ」とさげび、大楠公の精神を深く崇拜せられ、七生報国の念きわめて強く、晩年自ら大陸に進出せられたのですが、業半ばにして大陸の柱と化せられました。(後略)

春の一日

辻村 常助

神奈川県立第二中学校、即ち小田中ができて、まもなく阿部先生が来られた。

たちまち生徒が「伝ちゃん」といつているのを、ひそかに耳にして、「早いものだな。もう綽名をつけてしまったのか」と驚いた。しかし、「伝ちゃん」と字に書いてみると、いっこうさらに綽名らしくない。御本名を「デン」と申し上げるのか、「ツタフ」とよむのか、「ヒロシ」であるのか、うかがいもらしたけれど、生徒が「伝ちゃん」とかげでよぶのが、いっしゅの綽名らしさを感じるとともに、なにかしら、親しみの韻きをおぼえ、しらずしらずお人柄をしのびえたのである。

その阿部先生は、やがて僕の親戚の別荘がいていたのでお住まいになり、奥様をお迎えに

なつたのである。この屋敷は、のちに阿部さんに買っていたいて、ながく小田原との縁故をつないでいたのだのであつた。(後略)

小田原四人男

大屋八十八郎

阿部君といえは小田原を思う。小田中は、明治三十四年に周布知事の命により吉田庫三君が創立された。阿部君は首席教諭として招かれ、吉田君が和歌山県視学官として赴任後、校長となられた。そのころの校舎は、今の小田原駅のところにあつたが、駅の敷地となるので、現在の地に移転したのである。新敷地の選定には、阿部校長も苦心した。

教育上の見地から、この名勝の学校に歴史の背景を有する地を選定する必要ありと感じた阿部君は、名城の一部に着眼された。小田原城は宮内省の御用地であつた。白坂県視学官の協力により、御用地を拝借する許可を得ることになった。その地は、城内の森林中にあり、西に箱根を南に相模湾を眺め、風光絶佳である。(中略)

阿部校長は、生徒に対し、「日本人たることを常に心に銘ぜよ」と訓示された。

忠と孝とが、阿部君の一貫し

た信念であつた。小田原は、神奈川県下唯一の大藩の地であつた。阿部君は、この地を士魂の養成所とされた。(中略)

阿部君は、日本史を専門とされたから、小田原付近の古跡にくわしい。四人(引用者註：吉田庫三、阿部宗孝、木村繁四郎と筆者で親交があり、それぞれ校長を務め「小田原四人男」と称していた)が小田原に会合すると、教育談をよそに史談に花を咲かした。阿部君の住宅は、藩政時代の士族の家であり、古色蒼然、一種の特色があつた。

床の間には、根元易博士の「忠孝」の二大字の書幅がかけてあつた。

新婚の令室の小田原鮮魚の手料理に舌鼓をならしつゝ、史談が深更まで続いた。

栢山村は、二宮尊徳の生地である。阿部君は、二宮研究にも従事された。尊徳は、士魂農方の偉人である。・・・国民学校の校庭に尊徳像が建設されるようになったのは、阿部君の唱導の結果であるといふことができる。(後略)

「小田原史談」原稿募集!

次号の原稿締め切りは

五月三十一日(土)です。

史談再録③

『小田原史談』第六・七号 一九六〇年(昭和三十五年) 所載

外郎の虎と早雲寺の虎

中野 敬次郎

江戸時代の狂歌に

○三絃のトウチン香のその音は

千里に聞ゆ虎屋外郎

というのがあるが、これは小田原の外郎家の名声が、同家の専売する霊薬透頂香の名と共に天下に知られていることを歌ったもので、虎屋という屋号であったのをもじったものである。日本には虎は住んでいないのに上古から日本人が虎を知っているのは、昔は朝鮮に南鮮地方にまで多数住んでいて、日韓交通によつて往来する両国の商人や使者が、生捕りにしたもののや皮を輸入して宣伝したから、百獣の王としてその勇猛を想像し、巨虎一度吼えてその声千里に達するなど言われたもので、記録では最も古く日本書記に話が記され、万葉集にも虎を詠んだものが数種あらわれてくる。そこで屋号にも虎屋とつけると家名響き商運繁昌すると言われておつた。そうばかりには限るまいけれども、小田原の外郎家などは虎屋と名乗って正に凶星が当たった家柄だろう。

小田原の外郎家の祖先は我が国の鎌倉時代に、中国の元朝の順帝に仕え、官位が札部員外郎になった陳延祐という人であった。この人元朝滅びて明朝が興きたとき、二君に仕えることを潔よしとしないで日本の九州博多に帰化したのが、帰化後參禪薙髮して宗教と号したので、陳宗敬と名乗り、また旧官位が札部員外郎であつたので、姓名を聞く人あれば必ず陳外郎と答えたので、子孫は家の姓を外郎家と称することになった。二代大年のときから京都に住み、医薬業を以て足利將軍家に仕えたが、五代外郎藤右衛門尉定治のとき、大永元年(一五三三)北条氏綱の招きに応じて小田原城下に移住して、こゝに小田原外郎が興きたのである。

つたのは、享保三年(一七二八)に二代目市川團十郎が江戸の森田座で「若緑勢會我」を上演したときに団十郎らが外郎売りの姿に紛して舞台に立つて「外郎売りせりふ」を早口で述べたが、以後これが有名になって団十郎も名声を馳せし、代々市川家の家の芸となつて、歌舞伎十八番の中にも入り、また「早口せりふ」の流行さえもたらして一般民衆が競うて外郎せりふを習い覚えたので、歌舞伎と早言を通じて、外郎家の名と名乗「ういろう」透頂香が知られるようになったのである。

さて、その外郎売りせりふは相当の長文で、名薬いろいろの由来と効能を詳しく述べているが、その中にも「拙者親方と申すはお立合の中にも御存じの方もござりましようが、お江戸を立つて二十里上方相州小田原一色町をおすぎなされて青物町を登りへおいてなされ欄干橋虎屋藤右衛門只今は剃髪いたして内済となりまする(下略)」とあつて外郎家が屋号を虎屋と言つて、虎屋外郎と名乗っているが、いつ頃から虎屋を屋号としたかは北条氏滅亡後の江戸時代の初からであるらしい。

外郎家は京都在住時代には屋号を用いていないし、小田原に移つてからも北条時代には名乗

っていないかった。外郎家が京都にいた頃から透頂香を売っていたが霊薬だといふので知られ世人が外郎の薬と呼んで珍重したというが、家の本職は足利將軍に仕える儒医であつた。小田原に移つた藤右衛門尉定治は、京都在住の頃に、將軍義政の令によつて大和源氏宇野氏の継となつて宇野加賀守とも名乗つておつて、北条氏の招に応じて小田原に來住してからも、正式に宇野氏を称して武家として仕えていたものであつた。所領も武蔵国今成郷(河越)を持つて代官職をつとめ後に武蔵荏原郡高幡郷、上野国新田莊、同国館林田島郷などを加増されておつて、一方では家伝のいろいろ薬を広く關八州に販売しながら、北条氏に仕える有力な武士の一家であつたので、屋号を称することもなく、家も八棟造ながら、構は武家風で店頭を飾るといううなことはしなかつた。

ところが、天正十八年(一五九〇)小田原戦役で豊臣秀吉のために北条氏が滅されたとき、秀吉は北条氏の一族家臣の武家は一軒も小田原城下に残さぬ方針で、士分の者は全部小田原を落ちて行つたが、秀吉が小田原に入城してから外郎家を見て「誠に由緒ある家柄であり、透頂香も世に類稀なる名薬であるから是非保

存せよ」とのこととで、武家を止めて、医業と薬業とを専業として商家となつて永く小田原に留るやうにとの命令であつた。これから宇野家をもとの外郎家にかえし商家となつて屋号を虎屋と称するに至つたらしい。

虎屋と言つた理由は、同家は祖先の陳宗敬が中国から帰化した時にもたらしたという木彫の虎があつて重代の家宝として珍重していたところから、この屋号を用いたらしい。しかし、この家宝の虎は初めは秘蔵しておつて、これとは別に店先には板襖に大きな雌雄両虎の絵が描かれていて、東海道の道路上がりから見え外郎の虎として頗る名物であつた。

幕末の小田原大火で失われて今は見ることができないが、幸なことに、寛政九年版行された東海道名所図絵の中に精密な外郎家店先の絵があつて、その中にこの襖絵の両虎の姿が見え、昔の外郎店先の堂々たる風格がわかり、外郎の虎が名物として世に聞こえたのもさもあるうと思われる。この絵は誰が描いたのか同家に所伝がないが、東海道名所図絵巻五所載の絵図を見ると家は例の八方白壁の八棟造の宏大な構えであり、東海道の道路に面して軒先に「ういろう」と書いた丸看板がつるしてあ

り、店先に這入ると、向つて右側に「透頂香」と記した大きな漆塗衝立が立て、ある。問題の両虎の絵は店先と奥部屋との仕切りにはめられた壁板に一ぱい描かれてあつて、玄關真正面に雌虎、右側に雄虎で、一枚が長さ二間ぐらいあり、雌雄とも表道路をにらんでいるから、こゝを通る人は誰でもすぐ目につく筈で、虎屋外郎と言つて名物になつたのも無理はない。あたりを圧する誠に立派なものであつた。

この図絵を見て、すぐ私の頭に浮かんできたのが、箱根湯本早雲寺の方丈に描かれている両虎の大襖であつた。正面向つて右に雄虎、左に雌虎を描いた配置から、両虎のつづいてる姿態まで、外郎家のものと、早雲寺のものとが非常によく似ている。

早雲寺の方丈の襖絵は北条時代の遺品として有名なもので、一方に巨竜を描いているので、竜虎の襖と言われている。寺伝によると狩野古法眼元信の作と言ふことになっている。残念なことには両虎の眼のところが敗損しているが、これは明らかに意識して眼を抜いたものであつて、いつの頃損傷したものかわからぬが、話によると、虎が夜なく襖を抜け出して外に出てあばれるので、眼をとつてしま

つたのだということである。いづれにしても非常に、作風雄渾で優秀な作品であるので昔から知られておるが昭和三十二年神奈川県的重要文化財に指定された。

外郎家には元禄十一年早雲寺住職宗貞が記した同家の系図があり、一方早雲寺には外郎家と交渉の文書が残っているもので、これらの点からして、両寺家の間に深い関係のあつたことが窺えるが、早雲寺の開山以天宗清和尚(大隆禪師)は京都大徳寺住職であつたのを北条氏綱が招いて、父早雲の菩提寺として早雲寺を建立して開山せしめたものであるし、外郎家も氏綱の招きに應じて京都から小田原に移り住んだのであつて、両者の小田原下向が大永元年と伝えられるところなどからすると、両寺家には余程深い関係があるらしく考えられるので、その点から外郎の虎の絵を考えて見ると早雲寺の虎絵と外郎家の虎の間にも因縁があるらしく同一人の作品とまでは申し難いかもしれないが、同系統のもので、時代も余り隔たぬ時期に描かれたものであらうと思われる。

ところが、この外郎の虎の絵は幕末の文政二年二月四日の大火の際に焼失してしまつたので、この東海道名所図絵所載の

絵図などは、往時の面影をしのぶ貴重なものとなつた。この小田原大火は俗に半蔵火事と言われているが、筋違橋町に住んでいた大工の半蔵という者が同僚と喧嘩して火鉢を投げ付けたことから発火して、この日朝からの強風であつたから火が止まらず、筋違橋から山王松原までの間城下町の半分以上焼失したという小田原未曾有の大火で、小田原城三の丸の勘定所なども全焼した。外郎家は火元に近いところにあつたので出火後間もなく灰燼に帰してしまつて、惜しいかな、名物の両虎の襖絵も取り出すひまもなく失われたのであつた。そこで、虎の絵のなくなった外郎家では、以後はこれに代つて家宝の木彫の虎を店先に飾つたが、これも大正十二年の関東大震災のときに失われてしまつた。

虎のなくなった外郎家を今は虎屋と呼ぶ人はないが、家業はます／＼繁昌している。

中野敬次郎(一九〇三―八七)さんはこの文を「新春寅年漫筆」で書かれた。

小田原北条氏の虎といえば「虎朱印」が有名だが、こゝは虎の絵の話。外郎と以天禪師を結んだ点が京都だと推測が及んだとき、中野さんのペンが動き始めたのだらう。(青木 記)

飛鳥の史跡めぐりの旅

隠岐 明重

平成十九年晩秋の十一月十九日(木)〜三十日(金)の両日、「飛鳥の史跡めぐり」の旅が開催されました。

朝七時に、小田原駅西口をバスにて奈良へ向って出発しました。バスが東名高速道路に入って暫くすると、紅葉と深緑のコントラストの素晴らしい景色が車窓に映り、ウットリするばかりでした。今年は稀にみる夏の暑さで木の葉が痛んだため、紅葉の美しさは危ぶまれていましたが、十一月後半から急に気温が下がった影響もあった様で、旅行中各所で素晴らしい紅葉を楽しむことが出来ました。

旅行の宿泊は信貴山観光ホテルで、二日目は朝七時五十分にはホテルを出発して各史跡を巡った後、二十一時頃に小田原駅西口に帰着しました。

一般に史跡めぐりは多くの史跡を巡るため、一箇所が短時間の見学になりがちですが、今回は非常に中身の濃い「飛鳥の史跡めぐり」でした。それは、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館での若い女性学芸員の簡潔で適切な説明と、二日目の飛鳥観光ボランティアの的を得た丁寧な説明、それに加えて飛鳥の環境

と素晴らしい史跡がその要因とありました。

今回の旅の行程及び、バスの車内と各所で受取った資料などを基に抜粋した史跡情報を併せて以下に記しました。今回の史跡めぐりに参加された方々には旅の記録・思い出として、その他の会員の方々には飛鳥の史跡の紹介情報としてお楽しみ頂ければ幸いです。

尚、今回の史跡めぐりの旅を実施して頂いた本部役員の皆様に、改めてお礼申し上げます。

◇ 隠岐さんの原稿には、文中にある通り、詳細な旅程・見学した史跡の史跡情報の詳しい資料をまとめて頂いておりますが、紙面の関係で割愛させて頂きました。ご了承下さい。

編集部



ボランティアの説明を聞く

＜葦山・修善寺方面史跡めぐり ご案内＞

1. 日 時 平成20年6月5日(木) 小田原駅西口午前7時50分 集合
午前8時 出発 (雨天決行)
2. コース 小田原駅(西口)——蛭ヶ小島——葦山城址——江川家住宅・町立郷土資料館——堀越御所跡——願成就院——葦山反射炉——修禅寺——指月殿——源頼家の墓——小田原駅西口(18時40分頃 予定)
3. 会 費 6,500円
4. 受 付 5月15日(木) 午後1時より 伊豆箱根トラベル小田原営業所にて
(TEL 23-0266)

歩きやすい服装で参加しましょう

多数の方のご参加をお待ちしております

担当 小田原史談会 勝俣 (TEL 34-3939)

初詣 深川七福神めぐり 実施報告

1月12日(土)あいにくの雨模様でしたが雨の中、時間的にも心配された日程でしたが、ご参加のみなさんのご協力により、予定より大分早く、全ての参拝、見学場所をまわることができました。雨の中、お疲れさまでした。参加者29名



秀次宅門口上部



秀次宅の門口

久松 るす

深川七福神めぐりに参加して 田口鏡子

二〇〇八年、小田原史談会初詣での深川七福神めぐりのときである。深川江戸資料館に立ち寄ると、江戸東京博物館と同様に町並みが復元されていた。天保年間の古地図の一面佐賀町が想定復元されている。大店から庶民の長屋まで十軒余り。他に、火の見櫓、そば屋台、水茶屋、猪牙船に至るまで。船宿など覗いていると、時代劇ロケ現場にいうようで興味がつきない。当日は冷たい雨が降る生憎の日であつたが「江戸」の空気を充分満喫できた。

長屋の一つ春米屋の職人秀次さんの家の前で思わずシャッターをパチリ。その門口に赤い御幣を挿した棧俵が下がっていた。私の子供の頃、年末になると疱瘡除けのお呪いとして、赤い紙の御幣を子供の人数分だけ頂いてきて一枚一枚に子の名を書き、氏神様の棧俵に立ててくる。年末で大人は大忙し、私の家では子供が持つていった。そんな記憶が甦ったからだ。

この長屋の秀次さんには小さな子供が一人いる。門口には厄除けの御札のほかにもう一枚の紙が貼ってある。久松 るすと書いてある。不思議に思っ

ガイドさんに訊ねてみると、当時「お染風邪」が流行っていて「あなたのお染風邪」が流行って、うちには居ないから入って来ないで下さい」の意だそうである。帰宅してから調べてみたところ、当時、町民に熱くもてはやられていた歌舞伎の演目「お染久松」の名が、流行っていた風邪のニックネームになってしまったそう、他にも、お駒風邪(女郎のお駒)谷風邪(横綱谷風)お七風邪(八百屋お七)などと、流行の都度、風邪に愛称がついたらしい。

それにしても「久松るす」は洒落心か真剣な呪いか、それは不明としている。

奇しくも一週間前に発行された小田原史談第二二二号の史談採録②「子供るす」を読むにつけ、インフルエンザの脅威に恐れ戦いている昔の人々の姿が彷彿としてきた。ますます強悪になつてきたウイルスに現代人も悩まされ続けている。

資料館を出ると、道の真向かいにある佃煮屋さんの暖簾が目飛び込んできた。良く見ると、「日本一不味い佃煮」と裏返しに染め抜かれた暖簾だった。

Iさんは、急ぎ駆けつけ、一包みを手にして戻ってきた。それは店主自慢の日本一おいしい深川名物・浅蜷の佃煮だった。

＜平成20年度総会 講演会のお知らせ＞

下記により「平成20年度総会、講演会」を執り行いますので、会員各位には是非多数ご出席下さい。

講演会には会員外の方も参加いただけます。お誘いのうえ多数ご参加下さい。

記

日 時 平成20年4月26日(土曜日)

総 会 13時から ・19年度事業報告並びに会計報告

・20年度事業計画並びに予算計画

講演会 14時から 演題 「小田原宿と参勤交代」

講師 中村 静夫 氏

中村地図研究所所長

なお、講演会の後に講師と一緒に小田原宿を散策する予定しております。

場 所 小田原市民会館 第六会議室 (六階)

**ホーム・ページ
開 設!**

小田原史談会の“ホーム・ページ”が開設されました。
Adress(URL)は下記の通りです。是非いちどお訪ねください。

<http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/startpage.html>

落穂集

また春が巡ってきた。暖冬と言はれていたのに年が明けてから思わぬ厳しい寒さが続き、桜の開花も遅れるのではと懸念されたが、三月に入つての暖かさで例年よりも早い開花となった。

しばらく桜前線の北上が話題になるのだろう。

それにしても昨今の世間の姦しさは何としたことだろう。最新鋭の軍艦が小さな漁船と二人の漁民を道連れにして沈めてしまつたり、金融の大元締め日銀の総裁人事が迷走したり、道路を造るのか税金を下げるのかで睨み合つたり、後世の人々はこの時代をいったいどんな風に評価するかと思うと、うすら寒さが背筋を走る。

とは言え季節は確実に進み、若葉が萌えだし、桜の花が開き、小鳥や蝶が舞う。人の世でも若人が入学し、卒業し、フレッシュマンが社会に登場する。春はやはり胸躍る季節である。

翻つてわが小田原史談にも負けずにもっと沢山フレッシュな寄稿や御意見をお寄せ頂きたいものだ。本号には、昨年についてシルバー大学卒業生の研究成果を載せさせて頂いた。その他にも、ユニークな論考や記事を集めることができて、毎号のことながら寄稿いただいた方々にはここから感謝したい。

四月下旬には定例総会も開催される。

興味ある講演も行われるし、今回は講師ともども市内の旧跡散策も計画されているので、是非多くの会員、知人・ご家族の方々多数のご参加を願う。

まだおぼつかない編集子も、会員の皆様のご協力を頂いていつもフレッシュな気持ちで前進して行きたいものだと思ふ。

TEL 0465・34・8363
編集子 平倉 正

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

紳士服の **アメリカヤ**(株) **アルファ**

税理士 石原和夫事務所

伊勢治書店

㊦ かまぼこ

(株) **オクツ** 薬局

㊦ 小田原ガス

小田原報徳自動車

かまぼこ 籠 清

(株)カネボウ化粧品小田原工場

神尾食品工業 株式会社

かみやま小児科クリニック

興 電 社

小 伊 勢 屋

国 府 津 館

(有) 小松石材店

COMTEC コムテック株式会社

さがみ信用金庫

趣味のこふく さくらい

箱根湯本温泉 春光荘
雀のお宿小田原  **カマボコ**

匠 寿堂スポーツ

和 うどん 小田原城趾前 田毎網元 **ふる海**
直営

㊦ そびそ二 宮

茶半家具株式会社

ちんろう本店

東京電力(株)小田原支社

割烹料理 **鳥かつ楼**
うなぎ

和菓子 菜の花

杉崎茂法律事務所

平 井 書 店

(有) **古屋花店**株式会社 **報 徳**建築金物 (株) 星崎仲吉商店
家庭金物

本 多 時 計 店

栄 町 **松坂屋**学生専科 ㊦ **マルク**

諸 星 グ ル ー プ

曾我の梅干 **美の政**
塩辛・かまぼこ

みみづく幼稚園

ヤオマサ株式会社